

---

# 私は愛どる！春香＆千早過去編

ダディP

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私は愛どる！春香＆千早過去編

### 【Zコード】

N1123V

### 【作者名】

ダテイP

### 【あらすじ】

876・765合回ライブから帰ってきた千早は、絵理を迎えて行くからと預けられた愛・涼とともに765プロ事務所へ。そこで四年前の話を愛に尋ねられ、千早は過去へと思いを馳せる。

## その1『繋がった正反対』（前書き）

私が某動画サイトで書かせてもらっているnovels@site  
の過去話みたいなものです。

最近作りかけの動画が吹っ飛んでしまい、仕方ないから過去編を文  
章化でもしてストレスを解消しよう…とカツとなつて作ったもので  
すが、もちろん今後動画にも上げることになるので、ネタばれして  
ほしくないという方は閲覧を中止することをお勧めします。

このじは四年前のフリープロ『ユーナー日高』、春香千早、765  
プロとの出会いから始まる物語を描いていくつもりです。

## その1『繋がった正反対』

「ねえ、私の歌ばかり聴いてて、そんなに楽しい？」「うん、楽しいよ？だってお姉ちゃん歌上手だし、

それに 歌うから……。

「・・・ん？」

一瞬声が聞こえたような気がして、日高は公園の広場のほうに振り向いた。

公園に時計はいらない。その時その時の人出入りで、大体の時間がわかる。

そこで遊んでいた子供らがぞろぞろと帰っていくわば人時計に逆らつて、うまい具合に夕日の差し込む位置を避けたベンチに、彼は腰かけていた。

勿論遊んでいたいからではない。日高はマイナーなところだがアイドルのフリー・プロデューサーだ。

『伝説』とまで言われたアイドル『日高舞』の夫にして元プロデューサー。そんな彼はその時の大成功が原因で起きる、当然とも言える過度の期待に添えないプロデュース生活を送っている。

プロデューサーとして三年前にフリーになってから、少しのブランクを挟んで五年目。業界では彼はまだ若い。元々日高舞の成功だって彼自身の功績ではなく、彼女の素質に頼っていた面が大きい。彼もそれを自覚しているからこそ、その重圧を受けきれないでいる。今日はそうして悩みながらここに座っていたのだが……。  
(今のは歌声……だったな)

ふと聞こえたその声は、まるで彼を呼び寄せるためのそれのよつに、日高を自然とベンチから歩きださせていた。

「……」

「……」

広場に出ると、歌声がはつきりする。姿は小さくてよくわからな  
いが、公園のすみで一人の少女が歌の練習をしているようだ。

綺麗な歌声だ。ずっと日高舞の歌を聴いていた彼にそう思わせる  
ほど、彼女の歌声は対角線上に立つ彼にも透き通つて響く。

ただ、上手いといつてもプロの歌手に比べればまだまだ程遠い。  
人の心を掴んで離さないような魅力があるわけでもない。それでも  
何かがこゝ、心の中で引っかかるのだ、彼女の歌は。

「……？」

風がひとつ吹き抜ける。群青の髪がさらさらとなびいたその瞬間、  
歌声が少し途切れたように感じた。

「……あの、何かご用でしょつか？」

「……え？」

感じた、ではない。事実彼女は歌を止めて、今まさしく日高の田  
の前に立っているのだ。

気がつけば彼女に一番近いベンチに座り、じつと見つめてしまつ  
ていたらしい。

「あ、ああ悪い。別にそつこないわけじゃないんだ。ただ上手いなつ  
て思つてさ」

「そう、ですか？ ありがとうございます」

取り繕つて賛辞を述べたものの、彼女は日高に対する不信感がぬ  
ぐえないようだった。

「音楽学校にでも通つているのかい？ 趣味で片付けるにはもつた  
ない歌声だけだ」

「いえ、そんなところには通つません。全部独学なんです」

かたい表情は崩さずに、彼女は律義に答える。

「私は、歌手になりたいんです」 そう付け加えて。

心に引っかかるなにか、その正体はまだわからない。彼女の表情からは何も見えなかつた。

「キミ、名前は？」

「え？」

「え・・・あ」

引っかかりの解決を求めるがままに、名前を尋ねる。・・・が、これはなんかまずくないか？

初対面の女の子を無言で見つめた上で突然名前を聞くなんて、向こうからしたら不審者みたいじゃないか！？

「あ、いや、すまない忘れてくれ！ 答えたくなれば答えなくていいから！」

「！？」

心証は最悪だ・・・。」れじや変な田で見られるのも仕方な・・・。

「・・・如月、千早です」

「・・・え？」

そんな彼を滑稽に思つたからか、初めて彼女は柔らかく表情を崩した。

「聞こえませんでしたか？」

「いや、聞こえたよ。悪い、取り乱したりして」

「いえ、少しひっくりしましたけど」

そうして、少し笑う。

「つと、俺の紹介が遅れたね。俺は田高嶺司、仕事は・・・プロデューサーって言つてもわからないよな。アイドルを育てる仕事をしてるんだ」

「アイドルの、ふろでゅーわー？」

「・・・ああ、うん。マイナーな職業だからわからなくてもいいよ」

「そう、なんですか？」

いかにも聞き慣れないといった風な面持ちの千早に、田高は軽く

頷いた。

「アイドルとこりと、あのトレーニングに出ていたりする子たちのことですか？」

「ああ。とはいっても今はどの事務所にも属していないフリーだし、担当のアイドルもないけどね」

気がつけば陽はもうずいぶん隠れてしまっている。公園に見える人影はもうほとんどなかった。

「・・・話しこんで悪かったね、練習の邪魔をしちゃったな」

「いえ、こうして話すことが少ないので、楽しかったですよ?」

「ならいいんだけど・・・さて、そろそろ帰らないで大丈夫?夜遅くなると危ないし、親も心配するだろ?」

「・・・いえ、もう少し練習していきます。いつも遅い時間までやつてしているので、母もわかつていると思いますし」

(・・・?)

一瞬、表情が曇つたような気がした。ただ、気がしただけで実際千早の顔は何も語つてはくれなかつた。

「そつか。俺が口出すことじやないしな、俺は帰るよ。それじゃあ「ええ、それでは」

・・・俺は一体何をしているんだろう。

帰路の途中にあるわけでもないのに、真っ先に足が向いた。

気になつているのだろう。ただ、それはつきりした理由がわからぬのだ。

歌が上手い子はたくさん見てきたし、夢のために努力している子なんて例に漏れることなく全員がそれだつた。

「・・・こんにちは、田高さん」

「や、連日悪いね」

何故かこの子だけは妙に気になる。それはきっと初めて彼女に会

つたときから感じている心の引っかかりと、最後に見た暗い表情のせいだらつ。・・・やつぱりその引っかかりの理由はわからないままだが。

「わざわざ声をかけてくれなくてもよかつたのに」

「まったくの他人というわけではありませんし、挨拶ぐらいは。それに丁度休憩しようと思つていたところです。・・・隣、いいですか？」

「ん、ちょっと待つてくれ」

そう言つて日高は腰を浮かし、背後にある自販機に歩いていく。ガシャン！ といつ音を出して自販機は一本の缶ジュースを吐き出した。

「ほい、どっちがいい？」

「え？ いえそんな、悪いです！」

「いいのいいの、もう買っちゃつたし」

遠慮するなど千早の田の前に缶を差し出す。しぶしぶと右手に持つていたものに手を伸ばした。

「それにしても、昨日今日と来てくれますけど・・・暇なんですか？」

「ぐつ・・・！ 来てるのは俺が来たいからだが、暇といわれるのは堪えるな・・・」

「ふふ、冗談です。でも、やつぱりまだ所属する事務所は決まってないんですか？」

「ん~、いや。今日こんなことがあってね」

それは、三時間ほど前に遡る。

街中というのは雑踏というイメージがあり、皆がそれぞれ別の行動をとるための通過点であるため気を留めるようなことはないといがちだが、実はそうではない。

横ばかり向いた矢印の中で一本だけ上を向いた矢印を見れば、誰

だつて気になる。注目するほどではないまでも、「何だらう、あれ」程度には思うだろう。

・・・それがより長く、より太く、他と色が違えばなおさらである。(なんだ、あの人・・・?)

夏ではないが、日焼けしている人ならきっとビニールでもにいるだろう。そうではない。

『真っ黒』なのだ。服との継ぎ目がわからないぐらいに。そんな人間の形をした『何か』が道行く人たちを值踏みするように眺めている。

(あまり目を合わせたくないな・・・)

ああいう手合いは無視するに限る。そう思つと気持ち早足になるが、日高は気づいていなかつた。この時踏に合わせて常速にしていたほうが、彼の思惑に合つていたことを。

街中とは『雜踏』という文字通りのイメージがあるが実はそうではない。個々の速度は違うはずなのに、不思議なことに街中での速度というのは対して違わないのだ。そんな中で一人だけ速度を上げれば、今そこにいる黒い彼のよう目立つのは自明の理であり。

「おお、そこのキミーちょっと待つてくれたまえ」

「・・・」

同じく目立つ上、雜踏を值踏みしていた彼の目に留まるのは当たり前だつた。

声をかけられてしまつては、乱暴に無視するわけにもいかない。

「・・・何です?」

「うむ、よく来てくれたね。・・・ほうほう、うーむ・・・なかなか、いい面構えをしているね」

「はあ・・・あの、あなたは?」

「ああ、すまない、自己紹介が遅れてしまったね。私は高木順一郎といってね、アイドル事務所の社長をしているのだよ」

「アイドルの、ですか?」

「うむ、しかし最近始めたばかりでね、アイドルも一人しかいない

うえに、人材不足だ。そういうわけでこうして街まで出向いているのだが、なかなか見つからなくてねえ・・・

「それはもしかして、プロデューサーを探しているんですか？」

「ん？ ああ、そうだが、よくわかったねえ。それによくプロデューサーなんて言葉を知っているね。もしかして、芸能業界にかかわつていたりするのかい？」

「とりあえずフリーープロデューサーですけど・・・所属はないです」「ほう、それではぴたりじゃないか！ キミにはなかなか才能を感じるよ。ティンときた！ どうだい、765プロで働いてみる気はないかね？」

（ていん？）

高木という人は目を輝かせて（黒くてよくわからないが）、是非にと推していく。

「才能は、ないと思いますよ。期待に答えられないプレッシャーで、事務所という縛りから逃げただけですから。実力の裏付けがあつてフリーをやつてる人とは違いますし」

うつとうしい、という感情は不思議にも感じなかつた。ただここも同じだと、日高はたかをくくつてゐるのだ。

実力以上の期待をかけられるのはうんざりだ。そんなことは舞のプロデュース終了からずつと当たり前のようにあつたことだ。新人二年目から時の人というふうに扱われ、皆はそれがすべて舞の実力だということなど知らず持ち上げる。だからもしここでプロデュース活動をするならば、自分の力が理解され、過度の期待をされないことが条件だと、日高は思つていた。

が、日高の自分を卑下するよつた言葉に対する、高木の返答は予想とは違つていた。

「プレッシャーから逃げたいならアイドルプロデューサーを辞めればいいじゃあないかね。それをしないということは、キミがこの仕事を誇りを持っている証拠だよ。それに私は、人選眼には自信があるのだよ。もしウチで働く気が起きたなら、アポはいらないから」

65プロまで来てくれたまえ。地図を渡しておいつ

765プロはいつでもキミを待っているよー

そう言つて彼はその場を立ち去つた。

変に心地よい期待をかけられた気分だつた。

「・・・変な人ですね」

「やつぱりそう思つか?」

回想話を終えた千早の第一声は、予想の範疇をまったく射たものだつた。のだが、

「いえ、その高木つていう人もそうですけど・・・あなたもですよ、

田高さん」

「え、俺?」

それは予想していなかつた。思わず素つ頓狂な声で聞き返す。

「ええ、だつて口調が完全にその高木さんのこと信じ切つていまし  
たよ?」

「・・・すういな千早は、プロデューサーになれるんじゃない  
か?遠慮しておきます」

「はつきり言うなあ・・・」

完璧に千早の言つとおりだつた。田高は事実彼の言葉に人を信じ  
させる力があるように思つてゐる。

「でも、よかつたじゃないですか。事務所?は小さいみたいですけ  
ど」

「大きい小さいは関係ないさ。そこに夢を目指してゐる子がいるなら  
俺は自分のできる限りのことをする。それは変わらないからね」

そこまで言つて、彼はふと千早のほうを見た。

「つて、千早もそつだつたな」

「私は、歌手が夢ですから。アイドルには興味ありませんし」

「わかつてゐよ。ただやつぱり力になれなかつたなつて悔しいだけ  
だ」

「・・・本当に、変な人ですね。そうやつて他人のために何でもで  
きるつて人、私は見たことないです」

「そうか? そんな珍しいものでもないと思うけど」

「褒めてくれているらしいのだが、『変な人』扱いはそれほど嬉しいものではないな・・・。  
「いえ、羨ましいです。私にできる」といえば、未熟なこの歌しかありませんから」

「・・・千早?」

「・・・また、あの顔だ。」

苦痛に耐えて無理をしているような苦悶の表情ではなく、どちらかといえば胸の中でチクリと痛む棘がなかなか抜けないといったそれだ。

「いえ、ごめんなさい。ちょっととしゃべりすぎました。練習に戻らせてもらいますね」

「ん、頑張つてな」

『俺に出来ることはないか?』

なんて、軽々しく訊けるわけがない。あの千早の表情を見てしまつたら。でも、できることなら何とかしてやりたい。

千早と同じように、胸中のしこりは次第に棘のようになつて日高にも痛みを引き起こした。

日高が765プロの『』を叩いたのはその翌日のことだ。

「・・・あれ」

正確には戸を叩いても返事がなかつたので、ノブを回したのは、と言いなおすのが妥当かもしれないが。

「すいませーん、誰かいませんかー?」

声をかけながら事務所内に歩を進める。不思議なことに、人の気配がない。鍵が開いていたのに。

「～～～・・・」

「ん？」

いや、気配はある。というか声が聞こえた。

どうやら奥の別室に人がいるようだ。なんて不用心な。

先ほど出した声の大きさで気づかないほどだ。あまり大声を出しても意味がないだろう。それならこのドアを開けて直接声をかけたほうが効率がいい。それにこのあたりはちょっとした商店街のようになっている。あまり大声を出しそぎるのは迷惑だろうからな。

ガチャリ、と少し重い扉を開ける。

ピンク色のリボンが二つくついた後頭部が見える。ドアに背を向けてソファに座っているその女の子は、イヤホンをつけてなにか口ずさんでいた。

これは、GO MY WAY！かな？あまり音程が取れてないようだが・・・。

（いやいや、そりじゃない）

別にこの子を考察しに来たわけではない。早く声をかけなければ。

「あの、もしもし？」

「～～～？あれ、社長もう帰つてきたんで、す・・・？」

イヤホンをとつて彼女が振り返る。そこから硬直までのスムーズな流れ。

・・・いやな予感がする。

「」には落ち着いて、刺激しないように接しなければ。

「あのや、高木社長はいるかな？社長に呼ばれてここにきたんだ」「きやああああ！？どつ、どどどどど泥棒さんですか！？どこ

から入つてきたんですかあ！？」

すでに落ち着いてなかつた！？

彼女は口高から最も離れた部屋の向かいに全速力で逃げ去つた。

とはいえ場所の狭さが狭さなだけに、大した距離ではないが。

「いや、ちゃんと玄関から入つてきたよ。そりじゃなくて社長を・・

・

「えつとえつと、泥棒だから警察の110番！？じゃなくってそれは救急車だっけ！？」

「頼むから少し落ち着いて話を聞いてくれ！」

そのうち混乱してビビリとも呼び出しかねない。あまりやりたくない  
なかつたが強硬手段をとるしかなさそうだ。ソファを飛び越え彼女  
に向かってダッシュ、しかるのちに携帯を握る手を止める。その時  
だった。

「え……春香ちゃん、何が力声出してたけどないし……」

事務制服

事務制服を着た女性は現状を見るに少し考え方をよこな表情を見せ、そして言い放つ。

「さんですね？」

え？ あ、  
はい

え？ ふ、ふろでぬーさー？ 泥棒じやなくて？ 「

女性はひとつの間をあき、そしてこゝやかに、春香をかゝへん方体調極に入るとして、

「…から何か盗つていけるものがあると思つ?」

—

彼女のいかにも間抜けそうでの的を射た一言で、この騒ぎは幕を閉

じ  
た。

「はつはつは、すまないね。まだ始めたばかりの弱小事務所で、いろいろとやることがあって東奔西走しているのだが・・・如何せん前にも言つたように人材不足でね。事務所を空けることが多くなつてしまつのだよ」

それから十分程度して、高木が中心街から帰ってきた。昨日と同じように街中でスカウトしていたというが、成果は得られなかつたようだ。

「それでもさすがに鍵を閉め忘れるのは・・・」

「戸締りは小鳥くんに任せていたんだがねえ・・・彼女はしつかりしているんだがたまにこういつ風におつりよじりよいなところが出てしまうみたいでな」

社長の言葉に、小鳥と呼ばれた事務員は顔を少し赤くした。

（いや、おつりよじりよいというレベルじゃないだろ？これは・・・）

もし本当に泥棒が入ってきたらどうするつもりだったのか。

「それはさておき、よく来てくれた。改めて、765芸能事務所社長、高木順一郎だ。そして彼女が事務の音無小鳥くん」

「先程はお騒がせしました。音無小鳥です」

「日高嶺司です。これからよろしくお願ひします」

「彼女には今まで天海くんの世話も任せていた。簡単にでいいからあとで引き継いでおいてくれたまえ。・・・小鳥くん、書類の用意をしておいてくれないか」

「わかりました」

小鳥はそう言って会議室から出ていく。物腰の柔らかい人だ。社長の言つていた『しつかりしている』といつのはつそではないようだ。

さて、と社長は話を正す。

「もうわかるとは思うが、キミの隣に座つている子が担当してもらうアイドル、天海春香なんだ。これからはアイドルとプロデューサー、一人三脚で頑張つてくれたまえ」

「あ、あの～さつきは『めんなさい』・・・恥ずかしいところを見せちゃつて・・・」

紹介を受けた直後、春香はバツの悪そうな顔で隣の日高を覗き見た。

「別にいいよ、勝手に入ってきた俺が悪かつたわけだしな」

そう諭すも春香は口ごもる。じつと見ていると赤面したり青ざめたりと、本当に恥ずかしかつたらしい。日高は遠慮がちに笑つて場

を濁した。

「それじゃあ田高くん、私たちはキニを歓迎するよ。書類整理が終わったら早速天海くんとの活動を始めてほしい。よひーん、765プロへ！」

書類整理は滞りなく終了し、田高は早速応接室（というか事務所の一部をカーテンで囲っているだけだが）にて活動を開始する。対面のソファに春香を座らせ、自分はオフィスから持ってきた事務椅子に座った。

「それじゃ最初だし、ミーティングというか、軽く話そうか。お互いのことをほとんど知らないわけだしな、えっと……呼び方は春香、でいいのか？」

「うわひやい！？は、はいそれで！」

「……もしかして緊張してる？」

ソファから跳ね上がりそうな勢いで背筋を伸ばし、田に見えてかたくなつている体から耳をつんざくような声が上がった。

「は、はい・・・少し」

「すこしうるじやないぞ？大丈夫だよ、そんな堅苦しい話をするつもりないし」

「すいません・・・」

（困ったな・・・）

こんな調子じゃ距離なんて縮みやしない。どんな話題なら春香をリラックスさせられるか。

考え始めたとき、ふと先程見たプロフィールを思い出す。

「・・・ウチの娘がさ」

「・・・え？ 娘さん、ですか？」

「ああ、愛つて言つんだけど、もうすぐ九歳になるんだ。ま、もうすぐつて言つても一ヶ月ぐらい後の話だけど」

「はあ・・・・」

「それでさ、今年はちょっと趣向を変えて、いつもと違う場所でバースデーケーキを買ってやりたいんだけど、俺はそのところあまり詳しくなくてね・・・。春香はいいケーキ屋、知つてたりしない？」

「え、あ、はい！知つてますー」の辺のほうがいいですか？」

「ああ、よろしく頼むよ」

「それじゃまでは・・・わたしがよく行つてる商店街のケーキ屋さんで・・・」

甘いものが好きだと「プロフィールの通り、春香は味の良し悪しから「コレーション」やら「値段」やらを事小一時間ほどに渡つて事細かに話し始めた。

好きなことを話すときの春香の表情からば、先程のかたさなど微塵も感じじる」ことはなかつた。

余談だが、日高が普段利用していた場所は春香のお勧めには入つていなかつた。

(・・・すまん、愛)

「・・・が、そろそろ本題に入らうか、春香」

「で、ここ」のチョコレートの「コレーション」はすつじくかわいくてですね」・・・えと、ほんらいですか？」

「・・・やつぱり忘れてたか」

「・・・あ。・・・えへへ」

ペロリと舌をだして照れ笑い。なんというか、無邪氣といつべきなのかちょっと幼いというべきかわからかねる表情だ。

「えつと、自己紹介、はしたから・・・あ、日高さんの呼び方はどうしましょう？」

「なんでもいいよ。日高さんでもプロゲーミューサーでも」

それを聞いた春香は、『間をとつてプロデューサーさんで』、と答えた。

その発想はなかつた。まあいいか、別に不快なわけでもないし。

「で、お話ですよね？なんでも聞いてください！」

「そんなに構えなくても……じゃあ、春香はなんでアイドルになりたいんだ？」

「ふ、プロデューサーさん、質問が難しいですよ……」

「そ、そうか？誰かに憧れたとか、こんな風になりたいからとか、そんな感じでいいんだぞ？」

頭のリボンが日高に少し近くなる。眉間にしわを寄せ、顔を少し伏せているのだ。

「うーん、と少し唸るような声が聞こえてから、春香は顔を上げた。「憧れなら、たくさんありますけど……全部話すと長くなっちゃいそうなんで。

・・・歌が好きだから、とかじゃダメですか？」

（『私、歌手になりたいんです』）

「なんていうかわたし、あんまり歌上手じゃないですけど……。わたし、歌を歌うのが大好きなんです！だから、わたしの歌で誰かが元気になってくれればいいなって思つたんです！」

（『そりやつて他人のために何でもできるつて人、私は見たことないです』）

（『羨ましいです。私にできる」といえば、未熟なこの歌しかありませんから』）

春香の言葉につられて、千早の言葉が次々とフラッシュバックする。

どう考へても正反対の二人なのに、何故か思い出すこの言葉の本

質は・・・。

「・・・あの〜、プロデューサーさん? 聞いてます?」

「・・・え、うわ〜?」

気がつくと、春香が心配そうに覗きこんでいる。

随分近くなつていた距離に対応しきれず、椅子から跳ね上がるの

は日高の番だった。

「もう少しへ、プロデューサーさんつてば急に黙つちやつたからどうしたのかな、つて思つただけなのに、そんなに驚かなくても・・・」

「いや、ごめん。なんというか、既視感みたいなものが・・・」

「どーせありきたりな理由ですよう・・・」

「ちがう! そういう意味じゃなくて!」

ふてくされてしまつた春香を必死になだめる日高。この誤解を解くために十分程度の時間を要した。

閑話休題。

「よ、よし。とりあえず俺の聞きたいことは聞いたし、次は春香の番だな。何か気になることとかないか?」

「んー・・・気になる」といえば・・・プロデューサーさんの年齢とか、趣味とか?」

「お見合いじゃないんだから・・・まあ確かに突然気になる」といつて言われても、そのぐらいしか出てこないか」

よく考えてみたらそりやそうだよな、と苦笑い。日高の出した質問だつて、初対面の担当アイドルとは必ずしてくる話だつたし。

「えと、じゃあですね・・・プロデューサーさんはここに来る前に何をしてたんですか?」

「ん? そりや、プロデューサーだけど?」

そーじやなくてですねつ、と春香は大きくかぶりを振つた。

「どこの事務所で働いてた、とかどんなアイドルを担当してた、とかいろいろあるじゃないですかあ!」

「うーん・・・」

どうしたものか。

正直舞の事を話したくはない。だが舞を除いて六人のアイドルをプロデュースしてきたが、どの子も大体Cランク（メジャー・アイドル）止まり。今後のことを考えると、春香に不安を与えないようにしたほうがいいのだろうか。

「・・・まーた考え込んじゃった。それじゃプロデューサーさん、今までプロデュースしてて一番楽しかったアイドルって言つたら答えられます？」

「うん、それだつたらやつぱり舞かもな・・・あ？」  
「え・・・？ま、舞つてあの・・・？」

「いけない、口が滑つた・・・。」

しかし、舞がアイドルを引退したのは七・八年も前の話。  
(春香が知つてゐる可能性は低いはず・・・！)

「ああ、CランクだつたかBランクだつたかで終わっちゃつたけど舞つて・・・えつと、確かプロデューサーさんの名前つて・・・」「変な推理を巡らせんでもよろしく」  
嘘口上など右から左。春香はしばらくぶつぶつと呟いてから、  
「つて、そんなわけないですよねー」  
「すごい棒読みだな・・・はは」  
「あはは・・・」

「しゃあちよおおおおつつ！・・・！」

「叫ぶなあーっ！・・・そして走り去るなあーっ！・・・」

765プロの空気は、数秒間だが二人の足音に支配された。

「ああ、知つていたよ」  
「・・・はい？」

そろそろ窓際が紅く染まるうかという頃。

社長室のソファにもたれかかっていた高木の声に答えたのは二人

分の気の抜けたようなセリフだった。

「いや、知っているとも。私も少し前まではプロデューサーだったからね。そもそも業界人間だったら『日高舞』のプロデューサーを知らないわけがないだろう?」

「社長、知つてて黙つてたんですか!? ひどいですよー!」

春香の非難なぞどこ吹く風と、高木は高笑いするばかり。その横で小鳥は別段困つたというわけでもなく、ただやれやれといった身振り。高木の周囲の人間からすれば当たり前の光景なのだろう。

「それじゃあ、やっぱり俺が『日高舞のプロデューサーだった』から、あの時声をかけたんですか?」

しかし日高にとつてそれは裏切られたようなものだ。自分の信じた言葉が上辺だけだったということになる。

「・・・日高くん、キミは私の言葉をもう忘れたのかね?」

「え?」

打つて変わつて落ち着いた調子の高木に、思わず声を上げる。その表情は街中で見たそれとも、先程までの『愉快な社長』のそれとも違う、765プロダクション社長として、部下に対するときのそれだつた。

「『キミには才能を感じる』と。これは酷な話だが、プロデューサーという仕事は決して明るみに出ない『陰』の仕事だ。たとえばファンがアイドルを見たとして、それはすべてアイドルの実力、アイドルの功績だ。そしてそのプロデューサーの正確な実力を知つてるのは、担当したアイドルだけ。つまりね・・・」

「あなたのプロデューサーとしての力は、まだ社長にもわからなつてことですよ、日高さん」

「おお、こらーいら、小鳥くん。私のセリフをとらないでくれたまえ

「ふふ、『めんなさい。はい、今日はお疲れ様です、日高さん』

いつから給湯室に行つていたのか、小鳥は高木の言葉を遮り、口ヒーの入つた湯呑をテーブルに置いた。同じようにあと一人分を分ける（春香には別にジュースを入れた湯呑が手渡された）。

「あ、ありがとうございます」小鳥さん。・・・でも社長、そんな適当な

「適当なんかではないさ」高木は立ち上がり、少し胸をそらす。

「私にはこの目がある。昔から人を見る目『だけ』は自信があつてね。私はキミに見える人間性を信じて勧誘した、それだけだよ。私はキミを、信頼しているからね」

「しゃちよおー、自慢げにしないで下さいよお・・・。その『人を見る目』の所為でずっとプロデューサーもアイドル候補生もいなかつたんですからー」

「そうですよ社長！私たちがどれだけ人不足に喘いでたか・・・！」「お、おお・・・？ひ、日高くん、私は今自分でもなかなかいいことを言つたと思うんだが、なぜ彼女らに怒られているのだろう？」

「・・・はは、あははは！」

「ひ、日高くん！笑つていないで助けてくれたまえ！」

呆れる『アイドル』春香に、激昂する『事務員』小鳥、困惑する『社長』高木。

そしてねじが外れたように笑う『プロデューサー』日高。

これが彼ら、765プロの始まりである。

（そして、さつきから脳裏に映るもう一人・・・もし彼女がここに加わったなら・・・）

そんな空氣の中で日高は一人、心を決めた。

「社長、ちょっとといいですか？」

春香を帰し、書類を片し始めた日高は、自分にその権限がないことを思い出し、手を止めて高木に声をかける。

丁度業務も終わり、高木はオフィスで小鳥の入れたコーヒーをちびちびと口に含みながら休憩しているようだ。日高の声に「なにかね？」と短く応答した。

「いえ、初日から申し訳ないんですけど……アイドル候補生が一人増えるのは、事務所的に大丈夫でしょうか？」

「……それは、スカウトしたい子がいる、ということとかね？」

「はい。勿論社長には一度見てもうつもりですが、もしスカウトさせてもらえるなら、今から行つてこようと思つんです」

「つむ、その意欲はいいね！どんどんやつてくれたまえ！」

「ありがとうございます。……まあ、アイドルには興味ないと前に一度言われてしまつているんですけどね、あはは」

「ごまかすように笑い、止めていた手を動かし始める。

「ふむ……要するにキミはその子を放つておけないのだね」

「……はい。今日確信しました。春香にはきっと彼女がいい刺激になるし、彼女にはきっと春香が……ああいう子が隣にいることが必要なんだと思って。勿論独り善がりなのは自覚してます。けどきっと私が彼女にできるのはそれぐらいしかないので」

「つむ、先程も言つたように、私はキミを信じている。765プロのプロデューサーはキミだ。アイドルのため、夢を追つ子のために、自分の思うことを存分にやつてくれたまえ！」

高木の心からの言葉に田高は一礼し、事務所の扉を出た。

「いいんですか、社長？ あんなこと言つちゃって。予算もそんなにないのに、ちょっと無責任な気もしますけど……」

「おお、小鳥くん。今日は御苦労さまだね」

流して湯呑を洗つていた小鳥が首だけひょひょと出して高木に問う。

「さつきも言つた通り、765のプロデューサーは彼だ。そして社長は私。アイドルのために働くのがプロデューサーの役目ならば、それとなるべく円滑に運べるように策するのが社長の務めだよ。悪いけど小鳥くん、資金繰りの手伝いを頼むよ」

快活に笑う高木にひとつ溜息をもらし、小鳥は流しに視線を戻す。(ま、わかつてましたけどね)

影で見えないが、口元には笑みが浮かんでいるようにも見えた。

カン、カンと連続する金属音。765プロから続く階段を下りて、  
田高はひとつ深呼吸。

（そういえばスカウトするのって、初めてなんだよな・・・）

「どうしたんですかプロデューサーさん。暗い顔ですよ？」

「ああ、春香が気にするようなことじや・・・春香？」

「はい。プロデューサーさん出てくるの遅いですよー。」

「え、なんだ俺を待つてたのか？何か訊き忘れたことでもあったか？」

違います、と田高の言葉を一蹴し、よくわからない方向を指した。

「さ、行きましょう！」

「はい？」

「はー？じゃなくって！プロデューサーさん、今から如月さんとのところに行くんですよね？」

ああ、うん。田高は生返事。春香はどうか楽しそうに今にも走りださんとしている。

ああ、そういえばさつきちょっと話したっけなあ。

公園で如月千早という歌が上手い女の子と話したことを思い出した、と確かにその程度しか話してなかつたような気がするが、それにしてもこの春香の高揚っぷりは一体なんなのか。

「プロデューサーさん、早く連れてつてくださいよー！」

「いや待て春香。お前なんでそんなに楽しそうなんだ？」

「だつて、歌が上手なんですね、その子」

「うん、まあ」

『春香よりは』と言いかけて寸でのところで止める。

「プロデューサーさんが何度も聞きに行くような歌だし、わたしも聞いてみたいなって思って。連れてってくれますよね？」

「うん、まあ・・・俺に断る理由はないからいいけど・・・」  
千早がなんて言つだらうか・・・。第一ここ最近ずっと彼女の邪魔してゐる気がするし。

出始めに日高の漏らした溜息の意味を、春香は知らない。

「・・・ん、あー、あー」

喉の調子を確かめ、千早はひとつ息を吐いた。

（ちょっと、声を出しすぎたかしら）

練習を中断するのは気乗りしないが、喉を壊しては元も子もない。千早は自販機まで歩いてゆき、入金相応のボトル茶を拾い上げた。（そういえば、今日は来ないのかしら？）

ここ最近ベンチに見る影が今日はない。まあいらないならいで練習に専念するだけの話なのだが、何か物足りないような気もする。だが彼のおかげで練習の量が少なくなつていても事実。今のうちに詰めておかないと、と千早は休憩もそこそこに立ち上がる。

「お、と。今から始めるのか？」

が、それはいつもの声に阻まれた。

「・・・こんばんは」

「う・・・いや悪い。気にしないで続けてくれ」

別に嫌なわけではないが、出鼻を挫かれて千早は少し不機嫌そうに挨拶を返した。

「うわ、綺麗な人ですねえ・・・」

日高の隣にはどこか気の抜けたような表情をした春香。千早は彼女を示して、

「・・・日高さん、そちらの人は？」と尋ねる。

「ああ、紹介するよ。この子は天海春香、これから俺が担当するアイドル候補生だ」

「あ、あのっ、天海春香です！あなたが・・・如月さん？」

「はい、そうですけど」

そつけなく答えて、二人にベンチを勧める。

「ごめんな、ちょっと話したら」「の子、どうしても千早の歌を聴いてみたいって聞かなくてさ」

「それは、別に構いませんけど……私の歌は、まだ人に聞いてもらえるほどものでは」

「別に歌わなくても、発声練習でもなんでも千早がいつもやつてることをやってくれればいいからさ」

「はあ……」

何が楽しいんだろう、と首をかしげながらも、千早は楽譜を片手に広場へ戻る。

例の「ごとくうしろの自販機からジュースを一本持つて、田高はベンチに座りなおした。

「プロデューサーさん、プロデューサーさん」

「うん？」春香は千早を気遣つてか少し小声で口高に話しかける。「如月さんって、すつごく綺麗ですね……それになんか大人っぽいし。如月さんっていくつなんですか？」

「いや、それは聞いてないから何とも……春香と同じ年ぐらいなんじやないかな、背丈とかで判断するなら、ほい、スポーティでいいかな？」

「あ、ありがとうございます」

ぐるぐるとキヤップを外して、一口飲もうと傾ける。が、その動作は千早の歌声によつて止められた。

「こ、声も綺麗……それに、とっても上手……」

「ん、そうだな」

春香のきらきらとした目はじつと千早を見つめていた。注目を受けている当人は歌つている最中だからか、たいして気にも留めずに歌い続ける。

（さすがに三日連続で聴いていれば、この引っかかりの原因もわかるかと思つたが……）

全然わからない。千早のこの異様な無表情はもつと深くに原因があるといつことだらうか。

それが俺は、千早が春香と組むこと何か変わると思つてゐる。正反対なのに、いやだからこそ。

彼女らの根つこは同じなのだ。歌に対する『真摯な思い』は二人とも同じで、それが別の方に向かつてゐるんだ。少なくとも日高はそう感じてゐる。

彼女らは『繋がった正反対』だと。

「あ、あの！わたしすつじく感動しました！！」

「え？あの、天海さん・・・？」

「・・・え？ ちよつ、春香何してゐるんだ！？ 千早の邪魔しちゃだめだろ！」

「いえ、一曲歌い終わつた後ですから、それは大丈夫です。けど・・・

・一体どうしたんですか？」

気がつくと隣に春香がいない。慌てて声のしたほうに顔を向ければ、そこには千早の超至近距離に、両手を掴んで詰め寄る春香の姿があつた。

「如月さん歌すごい上手で、聴いててずつとドキドキしてたんですけど！あの、如月さん、アイドルなんてなつてみる気ないですか？わたし、あなたと一緒に歌いたいんです！」

それは俺の役目なんだが・・・。

「・・・ごめんなさい。私、アイドルには興味がないんです」「そ、そうですか・・・」

「いや千早、少しだけ考えてみてくれないかな？アイドル候補生としてF65プロに入つてほしいんだ」

「ふ、プロデューサーさん、如月さんはわつき・・・」

「日高さんまで・・・私、前にも言つたと思いますけど・・・」

「ああ、その通りだ。と日高。だがな、と続ける。

「こうして独学でずっとやつてゐるよりは、ボーカルアイドルとしてちゃんとした施設で力をつけるべきだと思うんだ。その力を荒削

りにするのは、悪いとは言わないけど、もったいないと俺は思う」「し、しかし私は・・・純粋に歌を歌いたいだけなんです。アイドルを馬鹿にするわけじゃないんですけど、アイドルの世界は純粋な歌の勝負ではないですし」

「そ、そんなこと・・・ないわけじゃないけど・・・うう、プロデューサーさん!」

「・・・どうしても、考えてはもらえないのかな?」

力なく口を開く日高に、千早は首を縦に振った。

「ごめんなさい。どうしても私は歌手になりたいんです」

「そつか・・・つまらない」と訊いて「ごめんな。そろそろ俺は帰るよ」

春香、行こうか。そう言つて日高は春香を連れ歩く。春香は終始しかめつ面を崩さなかつたが、広場の出口に着いたあたりで、ぱつと顔を上げる。

(・・・! テイントキタ! -! -)

「もひ、『日高舞の元プロデューサー』さんでも、できない」とはあるんですね! ! !

「はつ! ? 春香! ? 何を大声で・・・」

「え・・・『日高舞の元プロデューサー』?」

(ば、馬鹿! 突然何言つてるんだ! そんなこと今は関係・・・ん? )

春香の顔には先程の相ではなく、まるでいたずらに成功したちびっこのような、そんな表情があつた。その顔に面食つて、日高は毒気を抜かれた。

「ひ、日高さん・・・今の話は、本当ですか?」

「え、千早・・・?」

「本当ですよ、如月さん!」人は、八年前ぐらいた引退した伝説のアイドル『日高舞』のプロデューサーだったんですよーっ! !

「春香、一体何考えて・・・?」

「プロデューサーさんは嫌がつてましたけども」

「え?」

春香は日高に向かつて満面の笑顔を作り、

「ひつひつ使い方なら、いいですよね？」と囁いた。

（『日高舞』・・・あの伝説の歌姫を、間近で見ていた人・・・）

そして事は春香の思い通りに運ぶことになる。

「日高さん、先程の話ですが、やはり受けさせてもらつていいでしょうか」

「え、いやでも・・・プロデューサーだつたってだけだ。舞の実力に俺は関わつてないぞ」

「それでも、きっと得られるものはあるような気がします。日高舞の歌は何度も聴いてました。私の、憧れですか？」

「本当に、いいのか？」

日高は心配そうに問うが、千早の意思は固い。

（せつしうふうに見られるのは、心が痛むんだが・・・）

だがまあ、今回はよしとしておひつ。気は進まないが結果的に千早のスカウトに成功したわけだし。

それに、力が足りないと自覚しているのならそれをこれから補えばいい。春香と千早の期待に応えられるようだ。

「そつか、わかつた。来週の土曜、昼の一時に765プロ・・・えつと、社長にこの前渡された地図があつたな。ここまで来てくれ。ほら、春香。改めて挨拶しとけ」

「は、はい！わたし、天海春香、16才です！まだあんまり上手じゃないけど・・・歌が好きなことなら絶対に負けませんから、これからよろしくお願ひします！」

よほどうれしいのか、日高を押しのけてずいと前に出る。相変わらず日高はきらきらと輝きを放つたままだ。

（本当に、千早の歌に惹かれたみたいだな・・・）

これから共に活動する上で、少し心配になる日高。

「如月千早、15才です。歌以外には興味はありませんが、歌うチヤンスができるならば何でもするつもりです。これからよろしく、天海さん」

ピシイッ！

音まで聞こえできそつなべらこわかりやすく固まる春香。

「え、え、と・・・年下あ！？」

「あ、天海さん！？びうしたの！？」

「本当に、大丈夫か・・・？」

何かにショックを受けてへたり込む春香に困惑する千早。

今からこんなことで、『ゴニシト』として活動していくのだろうか・・・。

今後を思い、本気で心配する田畠であった。

## その2『e・s誕生』（前書き）

今回は前回から一週間後の話です。

コニーシート名にセンスがないのは気にしないでね？（迫真

春香と千早の共通点と相違点、演出するにはまだ腕が足りませんが、甘めの採点で読んでいただければなと思つております。

あ、あとひとつ注意書きとして、日高の名前は嶺司れいじと読みます。動画の視聴者様から賜つた名前です。感謝感謝。

四月中旬、土曜日。

日高の朝は早い。

朝の四時に起きて着替え、早朝の散歩を楽しむ。まだ温まりきっていない空気を受けて頭を醒ます。日高の家がある住宅街から765プロの反対側に出ると、千早に初めて会った公園に出入る。

千早の歌を聴いた広場を回り、煉瓦色の歩道を、脇に生い茂る樹木を見ながらぶらぶらと出口に向かつて歩く。

（今日から、始まりだな）

先週起こったことを鮮明に思い出した日高は、気合を入れなおすかのように大きな伸びをひとつ。そうして我が家へと帰ればそこには舞の作ってくれた朝食が、

「ないわよ」

「ですよねー」

元伝説のアイドルにして日高嶺司の妻、日高舞はHプロンを身につけながら、彼の応答にふう、と溜息をもらした。

「あのね、まだ五時よ？出来てるわけがないでしょ？」

「ん、まあそうか」

外はようやく日が差してきたが、舞の示す通り時計の短針は「5」の少し前にある。

「つて、舞はなんでもう起きてるんだ？」

「愛がね、今日早く起こせて喜うんだもの」

「なにかあつたつけ？」

「日直。前日直のときに遅刻して怒られたから、気にしてるんじやない？それあなただって、今日は早く起きると思つてね」

「なんで」

「自分の部屋に行ってカレンダーでも見てきなさいな。あんなに力強くマークしてあれば、誰だって今日何かあるって思うわよ」「いつマジックで何度もぐるぐる、と舞は人差し指を動かしてみせる。

「今日が初日なんでしょう？」と付け加えてから、彼女はキッチンへと移動した。

「初日は先週だけどな」

「あなたにとつての初日は今日なんでしょう？前より酷くなつてるわよ、プロデュース初日に早く起きる癖。前回は五時半だったのに」「一時間半ぐらい、大して変わらないよ」そう呟いて日高はダンシングの椅子に腰を下ろした。

初日であるなら気合いが入つて早く起きることなど当たり前、と日高は思つてゐるが、舞はそれが心配らしい。そりやあ心配にもなるだろ？

今回 つまり昨日の場合、日高が最後に起きているのを舞が確認したのは深夜一時。そこからすぐ寝たとしても三時間の睡眠しか取つていないので、それでいてこのすつきりとした表情は一体何なのか。

（愛も、いつこうといふのは嶺司さんに似てほしかつたわ）

到底似通わない一階のねぼすけを思い「ふふ」と笑みをこぼした。

（・・・やつぱり早かつたか）

まだ早いという舞の制止を振り切り、まだ人もまばらな道路を行つた結果がこれだ。

誰かもう来ているだろ？、と思っていたのだが、765プロからは光の一筋も漏れてはいない。

「出直すかな・・・」

そうして自ら軽く踵を返したその時、上空から声が降りかかる。

「あれ？プロデューサーさん！」

それは間違によつもなく春香の声だった。振り返つてみると階段を下りて、

「おつはよういざ、い、うわつたつた・・・・！」

今にも転びそうな・・・・転んだ春香の姿があつた。

「あいたたた・・・・もー、プロデューサーさんも見てたなら助けてくださいよーっ！」

「悪い悪い・・・・いやそうじゃなくて、なんで春香がこんな時間に？今日は昼一時からつて言つただろ？」

幸い怪我はしていないらしい。驚異の防御力だな、などと感心しつつ日高は軽く打つたらしい頭をさすつてやる。

「えへへ・・・・だつてわたし、今日がすつごく楽しみで仕方なくつて！もう昨日の夜なんて眠れなかつたぐらいで・・・・今もちょっと眠いです・・・・ふああ」

「んー、女の子が夜更かしはよくないんじゃないか？」

「それはそうなんですけど・・・・それよりプロデューサーさんはなんで帰ろうとしたんですか？せつかく来たんだし、事務所入っちゃえばいいのに」

「そうしたいのは山々なんだがな、鍵、開いてたか？」

そう言つて事務所の扉を指さすと、春香はふるふると首を振つた。やはり開いていないうらしい。もしかしたらまたおつちよこちよいをやらかしてくれるかと思つたが、そう上手に具合に都合よく行くはずもなく。

「それじゃあ入れないな。俺は鍵渡されてないから

「えーっ！？そ、それじゃあわたしはビデオすればー？まだ朝の七時だから、小鳥さんだって来ないのにー？」

「え、なに？小鳥さんってそんなに来るの遅いのか？」

「一週間に一回社長に軽く怒られるぐらいには

日高は肩を落とす。全然しつかりしてないじゃないか・・・。  
しかしそんな愚痴など言つてられない。春香は眠たそうだが事務所の扉に寄りかかって寝かせるわけにもいかない。

「仕方ない、春香。ちょっと歩こうか」

「んう～・・・?どこにですかあ～?」

「まあまあ、ついてればわかるよ」

そうして日高は眠い目をこする春香を連れて来た道を戻り始めた。

「・・・で?」

舞は今の言葉をさっぱり理解できない、といつたふうに棘のある言葉を返した。

「いやだからさ、春香に舞のベッド使わせてやつてくれないか?」

日高と同じく玄関で棒立ちにされている春香は状況が飲み込めていないのか、たまに首をかしげては小さくあぐび。

それを見た舞はため息交じりに「とにかく、上がらせちゃって」と呟いた。

「いいの?担当アイドルを家に連れ込んじゃって」

「人聞きの悪いことを言つくなよ・・・まあ確かに言つてしまえばその通りだけど」

事務所が開いてなかつたんだ、と言つとそれ見たことかとも言いたげに不敵な笑みを見せた舞は、無言でキッチンへと戻り、二人分のコーヒーを淹れる。

朝七時半。本当の光景はこうでなければいけない。春香を舞の部屋へと連れて行つた日高はテーブルの前へと腰を下ろした。春香は結局何もわからないままにベッドへと倒れこみ、すぐさま深い眠りへと沈んでいったが・・・まあ起きた時に説明すれば大丈夫か。

「そういえば愛はもう学校か」

「入れ違いみたいにして出て行ったわよ。学校は反対側だから、あなたは見なかつたかもしれないけど。そんなに早く出なくてよかつたのにね。・・・はい」

ありがとう、と一言。そうしてから舞の差し出したコーヒーを一口啜った。

「で、春香ちゃんだけ? どうするのあの子。寝かせたはいいけど、あれじゃしばらく起きないわよ?」

「とりあえず八時まで様子を見て、起こしても起きないようだつたら俺は事務所に行かなくちゃいけないから・・・」

「・・・私に面倒を見る、と」

「・・・ダメか?」

「別にダメっていうわけじゃないわよ。それで何すればいいの?」

「んー、と唸つてから田高は手帳を取り出し、空欄のページを一枚破る。

メモを一枚書き終えた田高は、出るときに枕元にでも置いておくよ、と二つ折りにしてテーブルのわきに置いた。

「ちょくちょく様子見てさ、もし起きたらこのメモに田を通すように言つてやつてくれ。・・・と、もう八時か。ちよつと様子見てくるよ」

「その前にひとつ聞いていい?」

舞の部屋へ向かおうとする田高を引き留め、

「なんで愛の部屋じゃないの?」

「・・・まあ、いろいろ散らばつてるだらうからな

「勿論、手伝ってくれるんでしょ?」

「・・・」

願いを聞いてもらつ立場の田高に拒否権はなく、手伝いとつ名の一人作業に一十程度を要した。

尚、事務所まで三十分、それからさらに十分経つてからやつと事務所の鍵が開くことになるのを田高はまだ知らない。

(ん~・・・ふかふか~・・・『ふかふか』?)

右半身の感触は春香の靄がかかつた頭にかすかな疑問を提示した。それでも体を起こすことを頭は拒否しているようで、仕方なしに薄く瞼を上げてみる。

窓からは日が射しており、春香に周囲の状況を確認するに足る明るさで、それによつてまず浮かんだのは、

「・・・ん~・・・?」

「こ~、どこ?」

疑問に対する答えではなく、さうに重なつた疑問だった。少なくとも春香には全く見覚えのないこの光景がどうして田の前にあるのか。

とりあえず事務所にベッドはない。事務所のソファなんてスプリングが伸びきつて寝心地なんて言つてられない座り心地なのに、『ふかふか』みたいな感想が出るはずがない。手を伸ばしてあたりを探つてみれば、体には『丁寧にタオルケットまでかかっている。

(えーっと確かに、電車で事務所まで来たのが七時で・・・プロテューサーさんに会つて、それから・・・?)

寝起きの頭を精一杯働かせても思い出せるのはそこまでで、とにかく起きようとタオルケットを退かしたその時、部屋のドアがゆっくり開いた。

「あらおはよ。気分はどお?」

「・・・え?」

Hプロトンをつけた彼女は近寄るなりベッドの縁に座つて春香を覗きこむ。

(あれ、あれ・・・?この人、すつ『ぐく・・・

「まだ眠い?でももう十一時なんだけど。そろそろ起きたほうがいいんじゃない?」

「・・・ああ」

・・・なるほど、夢だ。

よく覚えてない部屋のふかふかベッドで寝てて、起きたら『田高舞』にとんでもなく似てる人が田の前に来るなんて、こんなにわりやすい夢もそうない。

「起きなさい」

「はい・・・」

枕に顔を埋め、一度寝の体勢を取り、した春香を舞の一言が止める。

春香の意識が完全に覚醒したのがこの瞬間だつたことせぬつまでもない。

「田高くん、そろそろ休憩にじより」

「あ、はい」

高木の一聲で田高はペンを動かしていた手を止める。デスクに置いた携帯をとつて開いてみるが、着信はない。

（まだ起きてないのか・・・？）

春香を寝かせてからすでに四時間程度経過している。集合時間は十三時だから問題ないのだが、やはり様子を見に行つたほうがいいだろうか。どうせ迎えに行くのだし。

「せつからくの昼休みだ。どうだい、これからみんなで、下のたるき亭で食事でもしないかね？」

「みんなで、ですか・・・」

そんな田高に高木は親睦を深めんとするため昼食の誘いを切り出した。

たるき亭とは、765プロビルの一階に入っている食事処である。ランチタイムしか営業していない上客入りも田を見張るようなものではなく、それでいて破格の安さをさりげなく提示している。

たるき亭自体は765プロが出来る前からあるのだが、それまで

もそのような感じだつたため何故営業が成り立つてゐるのかなどと、いろいろ謎が多い場所である。

「おじりですか、社長！？」

会議室から駆け付けた（と言つてもドアをひとつ開けるだけだが）

小鳥はそれだつたら是非！と田を輝かせる。

「も、勿論だとも」とのたまつた後、高木は自分の財布を取り出して溜息。舞い上がつてゐる小鳥にその表情は見えていない。

「田高くんはどうするかね？」

「お誘いはありがたいんですけど、ちょっとこれから外に出る用事があるので、今回は遠慮させてもらいますね」

広げた資料はそのままに、財布を持って立ち上がる。

丁度ポケットに入れようとしていた携帯から着信音が鳴り響く。通話ボタンを押しながら田高は事務所を後にした。

バスで住宅街を抜けて、765プロの前をしばらく行くと、中心街

日高と高木が初めて会つた街に出る。都會のような雰囲気のこの街ではカフェやらレストランやらと横文字が多い。

田高と並んで歩いていた春香はその街並みを眺めながら「うわー・・なんかおしゃれですね～」などと田舎者のようなセリフを放つた。

「あれ、春香このあたり詳しいんじゃないのか？前ケーキ屋のことは結構詳しく教えてくれてたけど」

「わたしが詳しいのはケーキ屋さんだけですよ？このあたりにはあまり来ませんし」

「ん？ショッピングとかで高校の友達とかと来たりしないのか？」  
「しませんよ～。だつて家遠いですし。電車で一時間ぐらいしないと来れませんから」

「そんなに遠いと通勤も大変……ちょっと待て、一時間？」  
あれ、社長から聞いてませんか？」と春香は知っていると思つていたのか不思議そうに首を傾げる。

事務所で春香を見たのが朝の七時。通勤に一時間弱かかるとした  
ら……始発がぎりぎり出でるか出でないかと、いう時間帯だ。

人間、睡眠時間が足りなくとも意外と活動できるということだろう  
か、といつそり自分を正当化しつつ、昼食をとる場所を探す。

「プロテコーサーさんどうしたんですか？そんなにきょろきょろして」

「んー？ もう昼時だからさ、昼食を取らないと。春香はどうして食べたいとか希望あるか？」

「え？ そ、そんな悪いですよー。お昼は自分で弁当を作つて……」

そう叫んでかばんの中を探るが、それらしこものは一向に出でこ

ない。

「……来ようと思つてたんですけど……」

「あれだけ早く家を出たなら、時間はないよな」

日高の指摘を受けて顔を赤くする。

「うーん、こんなことならもう少し集合時間早めて、千早も一緒に  
食べればよかつたなあ」

「それだったら、一度事務所に戻つて如月さん……えつと、なん  
か言いにくいやな。千早ちゃんを待つてみたらどうですか？ もう十  
二時だから、ご飯食べると遅れちゃうかも」

「そもそも、ファミレスでミーティングっていうのも何か締ま  
らないものがあるけど……それじゃあどこでやるか日星をつけて  
おかないと。もう一度ここにきて迷うのも時間の無駄だし。でも春  
香、一時間も待てるか？ 寝るとすぐ体力使つて聞いたことある  
けど」

「……」  
「あはは……」

紅潮した頬をさりに赤らめながらも、春香は苦笑といつ形で反応を返した。

「オーケー、それじゃあシュークリームでも買って戻ろうか。千早と、社長や小鳥さんの分も買って帰らないとな」

「はいっ！あ、シュークリームがおいしいお店はですね～・・・」  
目を爛々と輝かせながら迷うことなくナビゲートを始める春香。  
しまいには置いて行かれた日高を、

「プロデューサーさん、ここですよ、ここ～～」

などと春香が大声で呼びつける。

街から出る直前まで一人は一般大衆から奇異の目を向けられる」ととなつた。

「こんばんは」

十三時。時間丁度に千早は765のドアノブを回す。

「あ、失礼しました・・・えっと？申し訳ありませんけど、お名前を頂戴してもよろしいですか？」

彼女を出迎えたのは、カーテンで仕切られた向こう側の空間から突然現れた、この狭い室内で何故かインカムをつけた女性だった。  
「如月、千早です。田高さんからのスカウトを受けてきたんですけど・・・」

「スカウト・・・ああ、先週田高さんが言つてた子～ちょっと待つててくださいね～」

「え、あの、ちょっと・・・？」

早々と奥の別室へ立ち去つて行つた彼女には、千早の声など聞いていないうつだった。戸惑つたような声は虚空に空しく響いて消える。

（・・・それにしても、なんというか・・・小さいところだけど）  
（こんなところでアイドルを始めたとして、自分の目指すものは見

えるのか。千早は早速不安になるが、先週聞いた言葉を思い出して、決意を新たにする。

(彼の下にいることで、少しでも『田高舞』に近づけるなら……)  
あの伝説的ボーカルアイドル『田高舞』の元プロデューサーである彼から、何かを吸収することができれば……あるいは私にとって代え難い経験になるかもしれない。

「おお、キミが田高くんの言つていた子かね？初めまして、になるかな。私がこのプロダクションの社長、高木順一朗だ。以後、よろしく頼むよ？」

「如月千早です、よろしくお願ひします。とにかく……田高さんはどうに？十三時集合だと言われたのですが」

「ああ、田高くんは先程中心街から帰つてきたところでね、これら彼の買つてきたシュークリームを食べようかとしていたところだ」  
よく見ると真つ黒な中で一点、白い部分がよく目立つ場所がある。  
なるほどあそこが口なのだろう、と千早は一人よくわからない納得を示した。

「すいません社長、遅れました！と、おはよう千早。よく来てくれたな」

「ここにちは田高さん。今回はありがとうございます」

「うん、これからよろしくな！……まあ、立ち話もなんだし、とりあえずこれでも食べるか？」

田高の差し出したシュークリームを遠慮がちに両手で覆つぱつて

して受け取り、会議室へと移動。そこには……。

「ふ、ふろでゅーたーさん！早くティッシュ取つてください、ティッシュシュー！」

「いや、この部屋探したけど見つからなかつたひつー？ちよつと取つてくるから待つてろ！」

シューから次々とあふれてくるカスタードクリームと格闘する先週の少女の姿があつた。

「……」

「ふあ、ちふあやちやんおふあよー！…」

「だあー春香つーしゃべるなー」ぼれそうだかー。」

・・・本当にいいで、何か得られるものがあるのだろうか？

当然の「ことくそんな疑問を抱く千早。

その数十秒後、千早の口元でも同じ格闘が繰り広げられる「ことく」なる。

「これから一人には、コニシットとして活動してもいいことになる」「ゆにつと、ですか？」

田高の言葉に千早が訊き返す。コニシットと云ふ言葉がどうにも聞き慣れないらしい。

その横で春香は、胸のあたりまでしかない小さめのもの（？）だがいかにも甘々しいチョコレートサンダーにスプーンを差し込んでいた。

「春香ー？聞いてるかー？お前と千早が一緒に歌うんだぞー」

「ふあーい、聞いてますよー？」

さつき甘じものを食べたばっかりなのに、よくもまあそんなに入るものだと感心する。

「私が、天海さんと…ですか？」

「千早ちゃん、呼び捨てでいいよ？年だってそんなに違わないでしょ？」

「あ、ええ・・・それじゃあ『春香』でいいかしら」

「うん、そのほうがいいよー」これからコニシットとして一緒に頑張るんだからー。」

「・・・ええ、そうね」

・・・一人で歌いたいのだけど、あまり出しゃばるのはよくないわよね。

「千早ちゃんと歌うの、楽しみだな～」と満足げな春香を他所に千早はどこか不満そうな表情を隠しつつ、置いてあるドリンクに手を伸ばした。

「んーでも、なんでユニットなんですか？765プロのアイドルってわたしたちだけですし、別々のほうがいいんじゃないですかね？」  
「いや、765プロはまだアイドルを一人も出してない事務所だからな。別々に出すよりユニットを組んでインパクトをとるほうが大事だ。一人より二人。オーディションを勝ち抜く可能性も増えるだろうし、それに」

一呼吸溜めてから日高は一人を見比べながら「お前たちがユニットを組むと、面白そだからな」と口元に笑みを浮かべながら。

「お、面白い・・・？」

「プロデューサーさん、理由になつてないですよー」

「いいのいいの。そのうちわかるからさ。それよりこれから売り出していくにあたってユニット名を決めておかないとな」

そうして日高は手帳を取り出すと、空白のページを線で二分し、その中央に『春香』『千早』と書いてそれを円で囲つた。

「出来るだけ一人のイメージにあつた名前を付けたいんだけど、俺一人じゃ知つてること少ないし、どうしても限界があるからな。そこに二人で趣味とか特技とか、好きな色でもなんでもいいから書き出してくれ。ユニット名はそれに沿つて決めよう」

「・・・み、見事にばらばらだな・・・」

銀色のスプーンがカラん、と底で音を立てると同時に、二人は紙を日高へと返した。

好きな色はピンクと青。趣味はお菓子作りと音楽鑑賞。イメージは元気と冷静。唯一の接点は『歌』という一点のみで、ある程度の予感はしていたものの、日高は頭を抱えた。

「これじゃちょっと難しいな・・・何か、他に何かないか?」う一発でイメージできてアイドルっぽいやつ!」

「そんなこと言われても・・・大体、アイドルっぽいってどんなのですかあ！」

「でも、確かに・・・まつたぐの逆ね、私たち」

千早が感慨深そうに言ったその言葉はさらに口調を悩ませる。その田の前で春香は「やつぱり横文字ですよねー。そりなんですよねー」とよくわからない一人会話を繰り広げていた。

千早は改めてメモを取り上げて眺めてみる。やけに大きく書かれた一人の名前の下に、スペースが圧迫されるほど書き込んでいる春香と、逆にまだ倍ぐらい書き込めるスペースを残している千早。性格もイメージも全く違うこの一人で接点を見つけようと言つのもなかなか苦労する話だ。

（・・・横文字？）

ふと春香の言葉を思い出した千早は、メモを左から右へ舐めるようにつめる。

『千早春香好きなもの甘いもの好きなものクラシック音楽好きな色ピンク好きな・・・』

「・・・『早春』？」

「・・・千早、それはちょっと・・・」

「なんかアイドルっぽくないかも？」

「違うわ。ほら、『』うして書くと・・・」

「人は怪訝そうな顔をするが、それとは関係なく千早は持っていたメモを裏返し、そこに

『千早 春香』

と離して大きく書き込んだ。

「で、こことここを消して・・・」

『早春』

「千」と「香」、この二文字を千早はがしゃがしゃと塗りつぶし、そこに出でたのは、先程千早の呟いた『早春』という文字だった。

「あー、確かに。全然気付かなかつた」

「えつと、英語で言つと・・・early spring.」

「じゃあ頭文字でも取つてみるか？」

「あ、それだつたらこつちのほうがいいですよー」

日高によつて『E S』といつ文字が書き出され、そこに春香が加筆した結果。

「『E-S』か、いいじゃないか。おしゃれな感じになつたな・・・といひでこれ、何て読むんだ？」

「『H-S』？それとも『I-E-Z』？ね、千早ちゃん。これつて何て読むのかな？」

千早は首を傾げながら「何て読むのかしら」としれつと言ひ放つたのち、ストローを咥える。

「ち、千早ちゃん・・・もう少し考えてくれても・・・」  
「思いつきで言つたことがまさかこうなるなんて思わなかつたから、何も考へてないのよ」

「ん、さつき春香の提案した『H-S』はよさそなんだが、確かにそんなタイトルの映画があつたような気がするからNGだし・・・」「なんで映画と同じだとダメなんですか？」

「いや映画と同じってだけならいいんだが・・・ちょっとその内容がえぐいやつでさ・・・前に舞が借りて来たのを愛が見て、眠れなくなつたつて聞いたことがあるんだよ」

それを聞いた春香の顔がみるみる青ざめていく。

「ほつ、ホラーですか？わ、わたし別のがいいです！」

「春香は怖いのダメなの？」

「やめて千早ちゃん！怖いとか一番思ひ出しちゃだめなのーーーうあーんつ、昨日見たのが蘇つてくるうーーー！」

「な、なんで見たの・・・？」

グラスを丁寧に退かしながらテーブルに突つ伏す春香にどうしたらいいかと千早はあたふたしながら手を空に泳がせる。日高は「千早、放つておいて大丈夫だよ」と呆れ気味に一言。

「怖いもの見たさつてやつじゃないか？ウチの愛もそれで眠れなくなつてたし。でも確かあればホラーじゃなかつたような気が・・・」

スプラッターは大丈夫なのにホラーが苦手な舞がまさかホラーを借りてくるわけがない、と日高は断言できる。

昔舞がそれを苦手とすることを知らず、借りて来た典型的ホラー映画を起動した瞬間、舞がソファの裏側に隠れてちょこちょこ顔を覗かせていたのはいい思い出だ。はたして今でもそつかはわからないうが、とりあえず得意ではないだらう。

基準がよくわからない上に普段とのギャップが凄まじいのだが・・・  
・そう考えるとそういうところは、舞と愛では似ていない。  
「じゃあ『イーズ』でいいんじゃないですか？語呂もよさそうです  
し」隣で鳥肌を静めている春香の代わりに、千早が答える。  
「んー、もう少しキリよく『イーズ』もいいかもなあ・・・まあ、今  
そこで悩んでも仕方ないし一人に決めてもらおう。春香、千早。  
どっちがいいかな？」

「私は、どちらでも」

「・・・・・」

「・・・春香？」

「・・・あつ、え、えと『イーズ』はなんかそのまんまですよね！  
わたしさ『イーズ』がいいなあ～！」

「ど、どうした春香？声が上ずってるぞ？」

「『ひつ』めんなさい、ちょっとほーっとしちゃって・・・」

「春香、大丈夫？」

心配そうに覗きこむ千早に春香は勢いよく頷く。

「んー、大丈夫ならいいんだけど。やっぱり寝不足なんじゃないか  
？」

「だいじょーぶですよ、わたしちゃんと寝ましたもん！」

「はは、これから夜更かはしないようにな。それじゃあ一人のコ  
二ツト名は今日から『e-S』だ。一人はこれからアイドルユニットとして活動していくことになる。千早も春香も歌がアピールポイ  
ントなわけだし、俺としては歌番組をなるべく仕事として選びたい  
と思う」

まあ最初はそう思い通りにはいかないだらうけどな、と日高は苦笑した。ふつと、千早の表情に影が差す。

(・・・・・)

「よし、それじゃあ早速明日から活動開始だ。と言つてもまだ挨拶回りの予定は決まってないし、レッスンから始めよ。トップアイドルを目指して、頑張るぞ！」

春香と千早を帰し、一人黙々とスケジュール表に向かいあう日高に、社長は一言「こゝ苦労だつたね」と告げて帰つて行つた。

出先の社長は夕日に照らされて少し赤みを帯びた色になつていて。  
・・・どうやつたら人はあんな色まで日焼け出来るのだろうか。

「あの～、日高さん。ちょっとといいでですか？」

遠慮がちな声がオフィスに届く。振り向くと小鳥が手を拭きながら給湯室から出てくるところだった。

「あ、小鳥さんお疲れ様です。片付けの手伝いですか？」

「いえ、そうじゃなくてちよつと・・・千早ちゃんのことで、お話を

が

そうして応接室のソファに「ちよつときゅ～けい」と口をあわんで腰を下ろした。

「あの子たちをコーチとしてトライバーをせんつて聞きましたよー？」

？

「ええ、そのつもりですが・・・何か、まずかつたでしょつか？」

「そういう意味じゃないんですけど・・・」

と切り出した小鳥は、神妙な面持ちで話し始める。

「私の個人的な意見なんんですけど、あの子たちって、まったく正反対だと思つんです。コーチを組むとしたら多分もつと・・・春香ちゃんとなら明るくて元気な子、逆に千早ちゃんとならクールな子と組んだほうが、コーチとして成功しやすいんじゃないでしょうか？」

か？」

「…………」

日高は不気味にも黙りこくりながら、手はせかせかと鞄に資料を入れ始めていた。

「え、あつ！」「これはさつきも言いましたけどあくまで私の個人的な意見で、日高さんの考え方とか私あまりわからないものですから・・！」

「いえ、俺もそう思つてますよ。春香と千早は今、アイドルとしての相性はそんなに良くないです」

「だから出しやばった意見とか・・・はい？え、じゃあなんで・・・」

「日高から出た予想外のセリフに小鳥は狐につままれたような顔をする。

「多分社長も同じことを思つてますよ、小鳥さん。だけど俺はいつもをコニットとして出す以外の考えはありません。今のところ見えている最終目標もありますし」

「さ、『最終目標』？トツプアイドルとは別の、ですか？」

「これ以上はダメですよ、いくら小鳥さんと言えど教えられません」まとめた荷物を持ち上げて、「お疲れ様です、小鳥さん」と一礼してから事務所を出て行つた。

「あつ、ちょ、ちょっと待つてください！最終目標つて・・・行つちやつた。それにしてもなんでわざと相性が合わない二人を組ませて？『最終目標』つていうのもなにかわからないし・・・」

「日高さんのケチーつ！？」そんなセリフが商店街全域にこだました。

同時刻。

千早は戸惑っていた。

春香に連れられたこの公園で、何故か当の春香は一向に口を開こうとしない。

（話しかけていいこと、なのかしら。私から話しかけたほうが？）

でも、「話したいことがある」という春香の目は真剣そのもので、自分から切り出してしまつてしまつていいものなのか、そんな懸念が千早の頭をぐるぐる回る。

「……わたし、おせっかいしちゃったかな？」

「え？」

ベンチに座つてから約五分。やつと口を開いた春香の口調には、先程のミーティングのときのような澁刺さは消え失せ、一回りしぶんだけふうだつた。

「おせっかい？ 春香が、私に？」

千早の問いに、春香は黙つて頷く。

何のことだる？ 千早にはその覚えがまつたくなかった。

「わたし、あのときの歌聞いた瞬間からどうしても千早ちゃんと歌いたくなつちやつて……こんなに歌が上手な人の隣で歌えたらどんなに楽しいかなって」

「……」

春風がすつと田の前を吹き抜ける。一人の髪がさらさらと横靡き、それにつられるように千早は立ち上がり、すたすたと広場へと歩いていく。

「でも、じめんなさい！ ……それってわたしのことしか考えてなくつて、千早ちゃんはアイドルには興味ないって言つてたのに無理やり引つ張つてきちゃつたんだよね……」

春香は相変わらずうつむいているが、声色に表情がありありと浮かんでいる。それを察してか千早は初めて自分から言葉を紡いだ。

「……春香、それなら私も言つことがあるの」

「え……」

広場で踵を返す。千早の姿が夕日に照らされときめりと赤く輝いていた。口元にはかすかな微笑。

「ありがとう。もしあなたがあの時、ああ言つてくれなかつたら、私はチャンスを逃すところだつた」

「あ・・・え？」

顔を上げた春香からは険しさが消え、しかしいまだ笑顔は見えない。千早の言葉は春香の脳内で何度も再生される。

（ありがとう・・・？なんで千早ちゃんが、わたしに？）

「伝説的ボーカリスト『日高舞』。私の目標はその人なの。小さい頃に彼女の歌を聞いて、それから歌が好きになつた。ラストライブはビデオにも撮つてあるし、『Alive』だつて何度も聴いているわ」

・・・いつか彼女みたいに歌を歌いたいって、ずっとそう思つていたの。

千早は過去を反芻するように視線を中空へと投げながら話す。

そんな彼女の姿は不思議な魅力に満ちていて、まるで違う時間軸に身を投げていれば、束の間春香は、千早がそこにいるのにそこにいないうな、奇妙な錯覚にとらわれた。

「『日高舞』の元プロデューサーである彼の元にいれば、きっと私が歌うべき歌のヒントを得られるかもしれないから・・・アイドルに対する興味はまだ沸かないのだけど、私には、歌しかないから」

こんなこと言つるのは春香に失礼だけど、と千早は苦笑いを浮かべた。

その時、春香にふと疑問が浮かんだ。

千早は『日高舞』に近づくために彼の元でアイドルを始めた。かく言つ春香も舞に憧れてアイドルを目指そうとした一人だ。けど、春香には『歌が好きだから歌つ』というおぼろげながら自信持てる理由がある。

ならば、千早は？

千早はたとえば『田高舞』に並んだとして、そしてそれからどう

したいのだろう・・・？

## その2『e・s誕生』（後書き）

ちなみに作中に出てくる『E・S』だったか『e・s』だったかの映画（本物の名前を忘れた）は本当にあります。

うｐ主は見すにパケの裏側を見ただけに留まりましたが、あれはどんな映画なんですかね？レンタルの棚には他にホラー物とかが一緒に並んでましたが。

春香さんが見たのはきっと携帯がフルフル鳴るアレじゃないですか、そのあたりの『』想像は読者様にお任せいたします。

余談ですが、動画の時もいつも一話あたりこのぐらいの長さのストーリーを入れているつもりです。どう見ても薄いのがより薄くなつてるけど。

映像描写がどうしてかうまくならない・・・まあ、仕方ないね。

### その3『春香ひとつで、千早ひとつ』（前書き）

二話目で『いやー』ます。

ちょっと古詞の掛け合いばかりで情景がうまく書けませんでした  
○→△

まあ今の自分には改良の腕がないので『』のままにしておきます。  
さて今回は私の大好きなシリーズ（笑）っぽい何かで書いてみ  
た。  
内容のほうについては、後書きにて少しばかり書かせていただきま  
す。

### その3『春香にとって、千早にとって』

きつかけは六歳か七歳かだった頃、深夜に起きてしま「やる」ともなくテレビをついたことだった。

深夜帯のテレビなど見たこともなかつた千早は、親も寝ている間に起きているという背徳感、とでも言えбаいいのだろうか。そんな感覚に後押ししながら画面の前で膝を抱える。

目の前で流れている番組は、アイドルが半分セクハラ紛いのゲームをしながら、それをクリアした一人のみが自分の曲を歌うことができるという典型的なアイドル番組だったのだが、途中から見始めた千早がそんなことを知るはずもなく。

勿論当時の千早を惹き付ける深夜番組などこれも含めて存在せず、五分ほど経つて飽きが来たのか、眠気の戻ってきた彼女は薄眼を擦りながらテレビを消して自室へと帰ろうとする。

その時だった。

画面脇で不満そうにしていた少女（とはいゝ千早よりも数段年上だが）から『話が違う』と怒号が飛んだのは。

どうやら自分の曲をワンフレーズしか歌わせてもらえなかつたことが不服だったらしい。

丁度スピーカーの近くにいた千早の耳を射抜いたその声に、彼女はどうしたことか改めて画面の前に先程より近い位置を陣取つて腰を下ろす。

当然このクレームが実を成すことはなかつたのだが、それでも千早には彼女の名前が深く刻み込まれることになる。

それから彼女について調べ始め、番組を録画しては視聴し、ついには弟をも巻き込んで。

彼女に、彼女の声に、彼女の歌に魅入られていった。

それが如月千早とアイドル『日高舞』との「アーストコンタクト」。

日高家の午後一時は、いつも一人に加えて密入二人を招き入れる珍しい形で始まった。

「……ど、どうですか……？」

テーブルの中央にはクッキーの広がった器。てっぺんに乗った一枚をつまんで、舞はそれを口の中に放る。

「ん~・・・うん、おいしいじゃない！ やるわね春香ちゃん」

「あはっ、あ、ありがとうございます……ほら、千早ちゃんも食べて食べて！ プロデューサーさんも！」

「え、ええ・・・ありがとう」

もう一枚、と取る舞を見て安心したのか、緊張しているのか全く動かない千早に春香はクッキーを勧める。

・・・春香、楽しそうだなあ・・・。

どうしてこんなことになつてしているのか。事の始まりは一時間程度前に遡る。

「プロデューサーさん！ お昼休みですよ、お昼休み！」

「・・・うん、おはよう春香。今日も元気だな」

営業から戻ってきた日高は、視界いっぱいに入つてくる春香を軽くいなしてデスクへとついた。

「・・・つて、え？ それだけ？」

「他になにかあつたつけ？」

「あるじゃないですか！ 今日千早ちゃんも来てるんですよー？」

「いや、今日はレッスンも仕事もなかつたはずだぞ？」

名指しされた千早は本に落としていた目を上げて、日高と目を合わせるなりヘッドフォンをとつて一礼し、また自分の世界へと帰つていく。

ユニットの相方にまで捨て置かれ、そりじゃなくつてーーと春香は独り相撲。

五月某日。デビューから約一月半が経ち、この一ヶ月で若葉から深縁へと成りゆくように・・・とは行かず、なかなか難航したアイドル活動となつている。

千早の歌はなかなか春香のそれと合わず、何より最初に選択したのは『太陽のジェラシー』という正統派アイドル楽曲なわけで、千早はあまり乗り気ではない。

その上で春香の歌は何というか・・・個性的なのだ。ものすごく上手下手を超越した何かを時折感じるほどで、そういうつた要因も絡まつてか、思い描いていたようにはファン数は増えないでいた。

「プロデューサーさん、今日は何曜日ですか？」

「うん、木曜日だろ？・・・あれ、平日じゃないか。二人ともなんでここに？」

「はあ・・・やつと氣づいてくれた・・・」

春香の遠距離通勤の問題もあり、仕事の少ないこのランク時期は活動をなるべく土日に絞っていたおかげで、日高は彼女を見た途端に今日が休日だと勘違いしていたらしい。

「えつへつへ~、実はここ一週間は、わたしも千早ちゃんもテスト期間なんですよー」

「テスト期間？」

「はい！だから学校が半日で終わっちゃって暇なので、事務所に来てみたんです！」

「来てみたんです！つて距離じゃないだろ・・・俺はこの後少ししたら営業に行かなくちゃいけないし、別にいてもやることないと思つけど。ただの打ち合わせだけだが付いてくるか？それともレッスンでもやる？」「

田高の提案に軽く首を振った春香は、何を考えているのか不敵な笑みを浮かべながら、

「んー、それよつも。プロデューサーさん…お昼休みですよーお昼

」

「春香、それじゃあ伝わらないわよ。せっかく持ってきたものもあるんでしょ？」

「あれ、千早。それはもういいのか？」

「これは趣味のクラシックを聴いていただけなの。プロデューサーも後で聴きますか？」

「んー、いや、聴くときは自分で借りて聴いてみるよ。それより春香、わつきかわづしたんだ？ やけに昼休みを強調してるけど」「えっとですねー」

田高の間に春香は言葉ではなく、かばんの中から袋詰めのクッキーを取り出した。

二十枚程度入っているそれはすべて綺麗なハート型を象っている。そういうえば趣味に『お菓子作り』なんて書いてあつたなあ、などと思いつ返す田高。

「ん、誰か誕生日なのか？」

「違いますよー。遅くなつちやつたけど、舞さんにお礼がしたいんですね」

「それで、せつかくだから一緒にに来ないかと春香に誘われて」

「お礼？ 初日のことか？ だったら俺が今日渡しておくれよ。・・・あれ？」

クッキーに手を伸ばそうとするが、春香は不服そうにそれを下げる。

「違いますよ、田高さん」

「ああ、小鳥さん。聞いてたんですか？」

「そりやあれだけ大声でしゃべってたら、聞きたくなくても聞こえますよ」

そうして持っていたお盆を給湯室に戻してから、「春香ちゃんた

ちは舞さんに会いに行きたいんですよ」と自信たっぷりに断言した。小鳥のセリフに二人は頭を上下に動かす。

「一人ともお休みだから営業に連れていく予定組んでないんじゃないですか？」

「まあそりですけど……舞が家にいるかどりかもわからないしなあ……」

「あ、それならわたしがさつき電話で聞きましたよ？」

「春香、なんで知ってるんだ……つてそうか、お前は舞に一回会つてるもんな」

その時に番号交換でもしたのか、まったくちやっかりした奴だ。

「……はあ、仕方ない。今日は一人とも仕事もないし、春香にいたつては四時間が無駄になっちゃうしな。けど、今回だけだぞ？」

「はあーい！」

「はい、ありがとうござります」

春香は田高の声に顔を綻ばせた。心なしか千早の口元にも微かに笑みが見える。

・・・ま、たまにはソリソリのもいいか。

「」最近上手く行かなくてモチベーションが下がつてたみたいだし、」うして笑ってくれるならそれに越したことはない。

オーディションが不振な今、営業に力を入れないと彼女らは芸能界からフェードアウトしていくことになる。そんなことはさせたくない。

だが結局は彼女らのモチベーション次第。それを管理するのもプロデューサーとしての義務。そのためには。

・・・少しでもいい仕事、持つて来てやらないとな。胸の内、堅く決意しなおす田高であった。

「・・・つて、ゆづくづしてるけど嶺司さん。時間はいいの？」

「お、そろそろ出たほうがいいな」

回想を終えた田高は時計を見やると、長針は丁度「3」を過ぎたところ。

話があるところ」と一度事務所に戻つてくのよ「こと高木に言われている。営業まで時間はあるが、話にどれほど時間とるかわからない。余裕を持つて行動するのが無難だな」。

「春香、千早。俺は行くけどゆっくりしていってくれ。あと、迎えに来たほうがいいか?終わつてからも事務所に戻るから少し遅くなるけど」

「大丈夫ですプロデューサー。もう道は覚えましたし、一人でも帰れますから」

「え、千早ちゃんもう覚えたの?」

「春香、一回目なんじやないの?」

「その……最初のが全部曖昧だつたから……それにこのあたり住宅街だから道が覚えづらくなつて……」

「……本当に大丈夫か?」

田高のこめかみがすうーっと冷える。千早は呆れかえりながらも「私が一緒にいるから」と春香を励ます。

「私が送つてあげたらいいんじやない?」

「愛が帰つてくる時間になるだろ?舞は家にいてくれ、な。あいつのことだから鍵忘れてるかもしれないし」

「うへん……」

クッキーを運ぶ手を止めて、少しばかり考え込む。すぐに答へは出たものの、舞は不満げに、「……はあ、わかつたわよう」と呟いた。

「それじゃあ舞、後は頼んだ。俺は事務所に行つてくれる」

「はいはい、行つてらっしゃーい」

「プロデューサーさん、頑張つてくださいーーー」

「よろしくお願ひします、プロデューサー」

「しゃーちゅおー。田高さん遅いですねえ」

社長室からひょっこりと出て来た高木に、小鳥は思ひ出したように問う。

「まあまあ小鳥くん、まだ彼が事務所を出てから一時間も経つてないんだぞ？昼食を兼ねていたはずだし、もう少し遅くても問題はないさ」

「けど社長、田高さんに話があるんじゃないですか？」

コーヒーを一口飲んだ小鳥だったが、眉間に皺を寄せながらそれを避けるようにして口から外す。

（に、苦・・・）

粉末を入れすぎたせいかはわからないが、とんでもなく濃くなつていたようだ。

すぐさまミルクを持つて「よつと席を立つが、丁度切らしていたことを思い出し、仕方なく元の位置に戻つた。

「うう・・・その話つて春香ちゃんたちのことですよね。時間足ります？」

「うん？何の話だね」

「え？だから春香ちゃんたちの調子が上手く行つてないことですよねつて」

「ああ、そういうことかね」

社長は「ふむ」と鼻を鳴らす。

「田高くんの方針については心配していないよ

「ええ！？な、なんですか？調子はどう見てもよくないです、少し軌道修正とか・・・」

「プロデューサーは彼だからねえ。彼女らを一番近くで一月半も見

ていた田高くんが、それに気付かないはずがない。それでも変更しないのなら、彼にはなにか考えがあるのだろう

それでも事務所に収入があまり入らないのは困りものだがね、と

高木は苦笑した。

「それより私が気になるのは如月くんのことなのだよ。小鳥くんは今まで彼女を見てきて、どう思つかね？」

「え？ どうつて……歌は上手ですし、容姿端麗ないい子だと思いますけど。あ、でも、十五歳っぽくないような気がします。大人びすぎているというか」

普段の風景を思い返してうーんと唸る。春香ちゃんのほうが子供っぽいのかしら、と一瞬考えたが、それは隅に追いやつた。「やはりそう思うかね。余計な詮索はするものじゃないんだが、どうしても気になつてね。とはいっても私は何も知らないし、日高くんに少し訊こうかと思つたのだよ」

「ふーん……。プロフィールには母子家庭つて書いてあつたし、何かと難しい環境ですから、そう言つた事情があるのかもしれませんしねー」

「只今戻りましたー！」  
「おお、日高くん！ 丁度いいところに帰つてきたね。早速話を始めよつじやないか」

勢いよくドアが開く。帰つてきた日高に意気揚々とした高木の声がかかつた。

会議室へと向かつた一人を見送つて、小鳥は一人机を探り、一冊のファイルを取り出す。

『如月千早 家族構成・母一人』

（大人びてる……というか、必要以上に自分を押し殺している感じがするのよね……気のせいかしら？）

答えを出すには情報が少なすぎる。だがもしかしてこれが日高の言つていた目的に関係しているかもしれない。

好奇心はあれども手が出せない。なんとももどかしい状況に耐えられず、小鳥は持つていたカップをひと思いに呷つた。

「……苦いっ……」

「あの、舞さん。訊きたいことがあるのですが・・・」

一方。のんびりとした午後のひと時を破いたのは、少しばかり震えながらも透き通った声だった。

千早の堅い一言に舞は「なあに?」と、いかにも緊張感なさげな反応。

「舞さんがなんで『アイドル』をしていたのか知りたいんです。あれだけの歌が歌えるなら、ボーカリストでもよかつたのではないかと思つて」

「ち、千早ちゃん・・・直球だね。わたしちょつとびっくりした」  
その言葉に一瞬、春香の顔が強張った。

それもそのはずだ。憧れの大先輩に向かって突然のこの発言。下手をすれば失礼とかそういうレベルでは済まされない。

「ん~? 私がアイドルをやつてた理由?」

しかし意に反して舞は表情を変えず、それどころかクッキー一枚放りこむと、

「これといった理由はないわよ?」

と一言に伏した。

「え・・・? な、何かに憧れてー、とかそんなのもないんですか? わたしも千早ちゃん・・・はちょっと違うけど、舞さんに憧れて・・・」

「あー、というよりは、私たちの前つてそういう『アイドル』があまりいなかつたから、憧れる対象がなかつたのよ」

九年前当時の情景を思い返しながら舞は「うん、やつぱりいなかつたわね」と呟く。

春香は話の流れが落ち着いたことにホッとしたのか、ずっと手つかずだったアップルジュースに口をつけた。

「それじゃあ、舞さんは何故アイドルに?」

千早はなおさらわからないといふ風に怪訝な表情。声色にも困惑が見て取れる。

「ん~・・・よく覚えてないから何とも言えないわね」  
けど、と舞は間を置いて。

「私らしい理由つていつたらきっと『楽しそうだつたから』なんじやないかしら。多分それ以外だつたらアイドルやつてないだろ?」  
千早ちゃんは、樂しくない?」

「・・・樂しいとか、そういうのはまだ私には、よくわかりません。  
・・・けど、ずっと目標だった『日高舞』の元プロデューサーに出  
会えたのは、奇跡だと思ってます。きっとこのままやつていけば  
舞さんのいう樂しさも、少しずつわかつてくるのかもしれません」  
「そ、そつだよ千早ちゃん!お仕事とか増えていけば、あつと樂し  
いから!」

「ん~・・・千早ちゃんは歌が歌いたいのよね?」

二人のやり取りにどこか違和感を覚えたのか、舞は少し顔をしか  
めながら割つて入る。その間に千早は迷う」となく首肯した。

「なんで歌いたいの?」

「そ、それは勿論あなたに追いつくためで」

「私を追つてて、千早ちゃんはそれで樂しい?」

「えつ?」

「ま、舞さん?」

二人は虚を突かれて言葉を詰まらせた。そんな二人はお構いなし  
で舞は言葉を続けた。

「じゃあもし千早ちゃんが私みたいに歌えるようになつて、その先  
には何があるかしら?」

「その先・・・?」

そう、その先。そつまこながら舞は空になつた器を下げるために  
席を立つ。

「もし私みたいな歌い方をして、全部完璧に真似したつて、そこにあるのはきっと『日高舞に「よく似た」歌』。私のすぐ後ろに千早

ちやんがいるだけで、私はきっと越えられない」

「そ、そんなことはありません！きっとその先だってそこにたどり着けば……」

「見えるって、本当にそういうふうに千早ちゃんはないの？」

「…………」

「あ、あの舞さん、もう……」

千早の叫びを背で受けて、返した言葉に千早は小さくなる。

『日高舞』を両指してずっと頑張ってきた千早だ、この言葉によるダメージは計り知れないものがある。春香は背中がじつとうと濡る感覚を覚えた。

「そこできっと止まっちゃうと思つた。それってすげく苦しいことよ。自分の可能性を自分で潰しちゃつてゐるようなものだから」

「……なら私は、どうすればいいんですか？」

うつ向き気味な千早は、新たにジューースの入ったパックを持って戻つてくる舞に問う。

「私には歌うことしかできないんです。あなたに憧れて歌い始めて、それでそれを否定されたら……！」

「誰かに憧れることができないなんて言つてないわよ、千早ちゃん？」

「……えつ？」

ふつと顔を上げる。千早の前には先程の難しい顔などなかつたかのようだに、柔和な表情をした舞がいた。

「アイドルっていうのは憧れられるためにいるようなものだし。だけど千早ちゃん、あなたに『日高舞』の姿を求めている人なんていない。だから私は越えられない。それはわかる？」

「…………」

「だから、千早ちゃんは『千早ちゃん』になればいいのよ。自分らしく、自分のために。そのほうが絶対楽しいから。それに、私も『日高舞一世』をみたいなんてこれっぽっちもおもつてないからね。それじゃ私がつまらないもの」

人差し指と親指を間を少しばかり開けて見せ、舞はにっこりと笑

つた。

『楽しい』

舞はこの単語を何度も何度も繰り返す。

楽しい？アイドルをすることが？歌うことが……？

「ね、春香ちゃん。笑つて歌えるアイドルと、そうじやないアイドルだったら、春香ちゃんはどっちになりたいかな？」

「わ、わたしですか！？え、と……できれば笑つてるほうがいいかも。わたしが楽しく歌つてなかつたらきっと、ファンの人に元気なんてあげられないし」

「ふふ、それでいいの。ねえ、千早ちゃんはさつき嶺司さんに会えたのが『奇跡』って言つてたけど、奇跡なんてただのきつかけよ？アイドルが『楽しい』って思うようになるか、そうじやないか。その奇跡をどう使うかはあなたたち次第なんだから」

（歌うことが楽しい……今は、楽しくない……？）

「ん？千早ちゃん、何か言つた？」

「あ、ううん。なんでもないわ、春香」

口に出ちやつたかしら、と千早は前に向きなおす。

ずっと歌うことが好きだつた。

今だつて、これからもずっとそうだと思つてた。けど舞さんに追いついて、それでどうするの？舞さんの見られなかつたものはそこにはない。私の見たかつたものも、きっとそこにはない。だとしたら私は、何のために歌を歌つているの？

いつからだろ？

いつから私は、歌を楽しいと思わなくなつたんだろ？

。

「舞さん、今日はありがとうございましたー。」

空が赤く染まり始める。夕焼け小焼けが鳴り始めて、住宅街に四時を告げる。

玄関で履き具合を整えながら、春香は笑顔でそう言った。

「一人ともこれからたまに来てくれてもいいのよ?」この時間ついつも暇だし、今日楽しかったし。あ、春香ちゃんはクッキーまた作ってきてね」

「あはは、氣に入つてもらえてよかったです」

「舞さん、私は・・・」

「ん? どうしたの千早ちゃん?」

「・・・いえ、なんでもありません。春香、そろそろ帰らなないと」

「あ、そうだった! それじゃあ舞さん、わよなー。」

「ええ、アイドル頑張つてね~」

慌てた様子の春香はそそくせとドアを開けて出でていぐ。それに続

こつとした千早だが、

「あ、千早ちゃん。ちょっと待つて」

「はい?」

それを舞の言葉が引き留める。ドアにかけていた手を戻し、ゆつくりと振り返つた。

「千早ちゃんは歌が好きなのよね? 歌つためだけにアイドルになつたぐらいだし」

「はい、まあ

「だつたらきっとあなたにもあつたはずだから。歌つて楽しいと思つていたことが」

「つー聞いて、いたんですか?」

「いめんね、私は千早ちゃんとの話に集中してたから聞こえちゃつたの。その頃を思い出せなんて言わない。だけビ、認めてあげほしいの」

「認める・・・何をですか?」

ドア外から春香の声がする。せつと千早を急かしてくるのだろう。

けどそれが聞こえたのは舞だけで、千早には聞こえていなかつた。

「なんだろう・・・『本当の自分』、つていうとわかりづらいかも  
しれないけど・・・歌つて楽しつつて思つている自分を、ちゃん  
と認めてあげなさい。それが千早ちゃんにとって今、一番大切なこ  
とだと思つから」

「・・・はい」

短く一礼だけして、ドアを開く。

こりやちょっと大変なんじやない、嶺司さん?

閉じていくドアを見送りながら舞は一人、そんなことを思つてい  
た。

「ふむ、それではキミの最終目的とは・・・」

「ええ、そういうことになります。勿論一人が望まないのであれば  
その限りではないんですけど・・・私の目標はそこです」

765プロの会議室。高木と日高の間には、得も言われぬ割り入  
りがたい空気が漂つており、

（うう・・・ど、どうしよう。お茶を届けに行くついでにちゃつか  
り話を聞いたり、うつもりだつたんだけど・・・そんな空氣じやあな  
いわよねえ・・・）

ここに一人の野望が崩れ去るうとしていた。

小鳥は薄く開けたドアの隙間から、ちらちらと中を窺う。部屋に  
差し込む赤い西日は、二人の影を一層黒く塗りつぶしていった。

「天海くんと如月くん。一人を組ませてからもうすぐ一ヶ月経つが、  
そんなところに組ませた目的があつたのだね」

「はい。ですがやっぱりそう簡単には行かなくて・・・。千早の歌  
はまだ『あの時』から変わらないままです」

『あの時』つて、日高さんと千早ちゃんが会つた時のことかしら?  
「気長にやりたまえ、と言いたいところだが・・・情けない話だが

「ちらのほつに余裕があまりなくてだね」

「スケジュールすかすかですかからね~。」

「春香のほうには少しづつ影響は出でているんですが・・・千早がいつも春香の魅力に気付くか。それにさえ気付いてくれればきっと何かしらの変化があるはずなんです」

春香ちゃんに影響? 最近妙にボイスレッスンに励んでる? こととか? でも千早ちゃんに春香ちゃんが影響を『えりてびつこつ』とか? しら?

「ううむ、少しのきつかけさえあればいいのだが・・・小鳥くん、いい加減覗いてないで出て来たまえ。こつちからは丸見えなのだから」

丸見え? なんのこことかしら? それに今私、呼ばれたような? うん?

「・・・こつからばれてました?」

「ドアが少し開いたときからだ」

「最初からじやないですか! 先に言つてくださいよ~。お茶、冷めちゃつたじやないですか」

「そんなになるまでそこにいたんですか? ・・・」

淹れなおしてきます、と踵を返す小鳥を高木が呼びとめる。

「まあまあ、丁度冷えたお茶が欲しいと思つていたところなんだ。持つて来てくれたまえ。それに小鳥くんも一人だけ仲間外れでは不満だらう?」

「田高さんは教えてくれませんでしたけど?」

口を尖らせてむすつとふくれる小鳥に、田高はがばつと立ち上がる。

「いや、違いますよ! ? 仲間外れにしたかったわけじやないんですか? ・・・小鳥さん、口軽ですから? ・・・」

「失礼な! 私は御近所様からめつぽう口が堅いって評判ですよ! 」

「・・・小鳥くん。私も田高くんに少しばかり同意するものがあるよ。と、その話はいいから落ち着きたまえ」

手をわたわたさせながらの謝罪も無駄に墓穴を掘るばかり。見兼

ねた高木は二人を仲裁し、対面のソファに腰を下ろさせた。

「まったく・・・まあ、話を続けようか。この件は一人にばれては意味がないからね。聞くからにはそことのところよろしく頼むよ、小鳥くん？」

「なんか釈然としないですけどわかりました。それで何なんですか、日高さんの目的って・・・」

会議室に影がひとつ増える。日高の言葉に神妙な顔をして聞き入る小鳥は、そのセリフに耳を疑つた。

「「くつしゅん！」」

一人揃つた見事なくしゃみ。日高家から帰りの道中を行く一人は何を感じたのか辺りをきょろきょろと拳動不審に見回す。

「千早ちゃん、風邪ひいた？」

「春香こそ。それにしても一人揃つてなんて・・・そんな季節ではないと思うのだけど」

「ひょっとして誰かが噂してるのかも。ファンの人とか！」

「ふふ、だとしたら舞さんとかは大変そうね。それでどうするの？事務所には戻る？」

「んー、プロデューサーさん戻つてきてるかわからないし、メールだけ入れて帰るっか」

言つが早いが春香は携帯を取り出して、指をピロピロと動かす。

「・・・」

「・・・」

「・・・春香、訊いていいかしら」

「んー、なーに？」

歩みを止めた千早に気付いて、春香はくるりと振り返る。

「春香は『本当の自分』って、何だと思う？」

「んー、ふーん？・・・舞さんに言われたんでしょ」「よくわかつたわ・・・んえ！？」

千早の両頬をつまんだ春香の手。

まーるかいてちゃん、まーるかいてちゃん。そつ言こながりあちらひらに伸ばしたり縮めたり。

春香は「わかるよう」と一言呟いてから、名残惜しそうに柔らかい頬から手を離す。  
「だつて千早ちゃん、田嶋さんの家出だからあつと難しい顔してたよ？」

「・・・そんなんに？」

「じぐりと頷いた春香は、千早の真似とでもこいつかのよひに田じつを釣り上げる。

「こんなになつてたもん」

「もう、そこまではなつてなかつたでしょ？で、どつなの？」

「本当のわたしだつけ。今のわたしがそんなんじゃないかな？」

「え？」

「舞さんに憧れて歌が好きになつてアイドルになつて、それでもEランクから先に進めない今のわたし。未来はわからないから本当の自分はまだいないとと思うし。千早ちゃんはどう思つてるの？」

まるで光と影だ。一人はくつつきながらも交わることのないそれのように、まるで対照的な心境だつた。

「・・・わからないわ。けどそつやつて自分を信じて前に進める春香は、すごいつて思つ」

「前に進むなら千早ちゃんだつて同じだよー。すつと歌の練習しつきたから、そんなに上手になつた歌があるんでしょ？」

天真爛漫な笑みを浮かべる春香を直視できずに、千早はふいと田を逸らした。

『もし千早ちゃんが私みたいに歌えるよつになつて、その先には何があるかしら？』

きっとあるはずなのだ。千早自身が探していた何かがそこにはあつたはずなのだ。いや、

あると無理やり思い込んでた？

『アーニに千早ちゃんはいないのに』

その通りだ。その先にあるのはきっと『舞が見られたかもしけないもの』で、千早のものではない。

その点、春香は違う。自分の中の歌に対する想いを迷わず歌にぶつけることで、あの明るい歌は成り立っている。だとしたら彼女は今歌うことで精いっぱいで、未来や過去など気にすることもできないのだろう。

彼女の言っていたことは的外れに見えて、意外と核心を突いているように思える。

『歌つて楽しつつて思つている自分を、ちやんと認めてあげなさい』

私の中にもいたのだろうか。あつたのだろうか。いや、歌は好きだ。今でもそう思つている。

けど、大切な何かをどこかに置き忘れているような気がするのは何故だろう。

頭上、初夏の夕焼けはじりじりと闇に支配されつづった。

### その3『春香にとつて、千早にとつて』（後書き）

舞さんはいつも通りです。

そんな舞の姿に一人が何を抱いて、これからどう変化していくのか。これ（このシリーズ）を書く前にふとわかつたのが、アイマスのキャラクターには一種類いるということでした。

目的があつて歌を歌う者。それが例えばかわいらしくなるためであつたり、自分を認めさせるためだつたり、運命の人を見つけてもらうためだつたり。

反対にそれを持つていらない者。歌が楽しいから歌う、面白いから歌う。

後者に当てはまるのが自分では『春香・亜美真美』の一人（舞を含めて三人？）しかいないと思っていて、本当に強いのはそういう子なんだろうな、と感じています。

長文失礼いたしました。

#### その4『緩やかな休日、緊迫した過りし方』（前書き）

更新が遅くなつて申し訳ありません・・・。

さて、春香たちもランクに上がってこれからが正念場ですね（ランクアップ期間的な意味で）。そんな彼女らですが、休日だつてあります。遊びたい年頃なんです。

今回はそんな緩やかな話から始まつた、よくわからないお話。

#### その4『緩やかな休日の、緊迫した過りし方』

とある夏の日曜日、午前十時。

いつもならばプロデュース活動に勤しんでいたはずのこの時間だが、今日は珍しくオフとなつてい。

朝食を済ませ、少しばかり街でも歩いてみようか、と日高は早速今日のスケジュールを立てる。

しかしそれは小刻みな振動音により阻害された。

「ん・・・? メール?」

そうしていつもと変わらないはずだったその日の朝は、奇妙な文面を迎えることから始まった。

『プロデューサーさん! 日曜日ですよ、日曜日!』

「・・・・・」

もはやすっかり眠気の醒めているさすの田を、じりじりし擦り、そして何事もなかつたかのようにパクン、と閉じた。

「・・・・・」

その直後、聞き慣れた着信音が耳に伝わる。

1 ポール。妙な予感を覚えながらも携帯を開く。

2 ポール。表示された名前はつい数十秒前に見たそれだ。

3 ポール。メールの文面を思い出す。

4 ポール。おそれく言われるであろう内容を想像しながら、「もしもし」

日高は通話ボタンを押した。

『プロデューサーさん! 日曜日ですよ、日曜日!』

「それはもう見たから・・・」

『じゃあ返事してくださいよー』

不満ながらもどこか弾んだ声の春香。

ここ最近Dランクアイドルとして少しずつ忙しくなつてきたので、

たまの休日がうれしいのだな。』

千早もこの日は休みたいと言つていたので迷うことなくここにオフを当てたのだが・・・アイドルとして人前に出ている身とはいえ、やはり春香も年相応の女子らしく、休日を楽しもうとしているらしい。

『と言われても見たのついさつきだしなあ。・・・なんだか後ろが騒がしいんだけど、外にいるのか？』

春香の声が時折周囲の雜音で聞こえなくなる。この音は・・・車か？それに信号、人も多いな。

『はい！せつからくのお休みですから、中心街でいっぽいお買い物したいなって思つて！』

『いいじゃないか。これから忙しくなりそうだし、今日一日は一日一杯リフレッシュするんだぞ？・・・で、なんで電話したんだ？今友達とかと一緒にだろ？』

『そう、それですよプロデューサーさん！！』

突然の大声に日高はとっさに耳を離す。

『誰も一緒に来てくれなかつたんですよーーーみんな用事あるつて言つてーーー！』

キン！と一瞬金切り音が通り抜ける。反射的に電話から半歩身を引いた日高だったがダメージは甚大。少し目を閉じて、そしてまた電話口に戻つた。

『わ、わかったから落ち着け。・・・じゃあ千早は？つて、そういうえば今日に休み入れたがつてたの千早だつたなあ』

『念のため電話してみたんですけど、やつぱりどこかに出かけるみたいですね』

『・・・それで、俺に電話したわけね』

街にいて一人つていうのは寂しいよなあ・・・。

休みの中心街は人が多い。そんな中で女子高生の春香が一人でいて何が楽しいわけでもないし、むしろ周囲の状況如何では逆にストレスが溜まらない。

それにプロデューサーとして、所属アイドルを一人で放つておく  
わけにもいかない。

「わかった。それじゃ俺も準備するから、事務所まで来てくれるか  
？ああ、あともしかしたら連れが一人いるかもしないけど、いい  
か？」

『全然オッケーですよ！むしろ大歓迎です！じゃあ十時半ぐらいに  
行きますからー！』

「あ、おい春香！事務所行くまで俺三十分かか・・・一方的に切り  
やがつた」

声の途絶えたことをもう一度確認してから終話、早速と口高は部  
屋を出て一階へ向かう。目的はただ一人。

「愛ー？いるかー？」

コン、と扉を叩いてから開けてみるが中はもぬけの殻。

おかしいな、土曜日だったらい一度寝とかしても不思議じゃ  
ないんだが。

起きたときのままにしてあるのか、無駄に汚くなっているベッド  
を少し手直ししてから下に降りる。

「愛なら遊びに行っちゃったわよー」

リビングに入った口高に、覆いかぶさるように聞延びした口調で  
舞は告げた。

「そうなのか？」

そう、というそつけない返事とともにテレビのチャンネルが変わ  
る。正面のソファに座っている舞はつまらなさうにリモコンを握り  
ながら、振り返らずに口高に返す。

「学校の友達とね。えっと・・・やよいにけんだったかしら。嬉し  
そうに出て行つたけど」

「タイミングが悪かつたなあ。ま、そういうことなら仕方ない」

「私は行つちやだめなの？」

「・・・何しに行くかわかつてゐのか？」

「全然」

「・・・」

「冗談よ、冗談。私今日用事あるもの。春香ちゃんとのお買い物も楽しそうなんだけどね。ちゃんと春香ちゃんの面倒見てあげないとダメよ、プロデューサー？」

「わかつてたんじやないか・・・ってあれ、なんで知ってるんだ？」  
「電話、春香ちゃんだつたんでしょ？ 街にいるつて言つてたみたいだし、買い物以外に何かすることある？」

「映画とか」

考えてなかつた、と舞は思つたより素直に答える。

「はあ・・・ま、プロデューサーとして荷物持ちにしつかり精を出させていただきますよ。あー、そいいえば最近三人で出かけてないな。今度の休みにでも出かけるか？どこか行きたい所もある？」  
「うーん、と少し唸つてからプリントと電源を消して、ソファにもたれかかるよつにして振り返る。

「そいいえば愛がアイドルのライブに行きたいって言つてたわよ？」

「・・・俺にどうしろと？」

「いや、いり・・・」

そう言いながら両手を右から左、右から左と絶え間なく動かす。

「？」

「そいつチケット、社長とかから貰つたりしないの？」

「ああ、そいつこと。前のプロダクションならあつたかもしけないけど、765プロはどつかない・・・あまり期待しないほうがいいかもな」

貧乏と社長いらぬつぽどだ。確かに予算は少ないし給料もそれほど入つては来ない。どうして営業できているかすら、日高でも不思議がつっている。他事務所のアイドル資料も大体映像資料だし。番組録画の。

「じゃあ春香ちゃんたちのライブ日程とか教えてよー」

「・・・チケットは自分で買つてくれよ？」

「けち」

「なんでだよ・・・」

まあそつ答えるような気はしてたけど、と軽く身支度を整える。

「何よー、その溜息ー」

「なんでもないよ。それじゃあ俺は行くから」

買い物に付き合へ、といつことは持ち物は少なければ少ないほどいい。

春香の言葉を思ひ出しながら財布の中身だけ確認して、会話から逃げるように靴を履く。

「春香ちやんにようしきねー」とこつ間の抜けた声が聞こえて、それからゆっくつと玄関扉が閉じた。

街は熱氣に包まれていた。

朝は涼しかったのになあ・・・。

それは別に何かイベントなどがあつて盛り上がりつゝとか、そんな心躍るものではなくて。

「春香、そろそろ・・・」

「プロデューサーさん、もう少しですから頑張つてくださいよー」「・・・それ、二回目だが

右手に三種類、左手に同じ三種類の袋をそれぞれぶら下げながら、ふらふらと危なつかしく歩いている口高に、春香は餌をやるどころか鞭を振り回した。

周囲からの憐れむような面白がるような視線が口高に注がれている。

しかしそんなことは意にも介さずゆっくつと前に、前に。口の前にいる少女を追つて歩を進める。

外を少しも確認しなかつた俺も悪いんだけどな・・・。

当然、その異変に口高が気付いたのは家を出てすぐのことだ。

事務所に行くまでに珍しくバスを利用したのも、原因はこれにあ

る。

「暑い・・・」

これまで影も形も現さなかつた『夏』がたまたまタイミング悪く重なつたのだ。

正午も近くなり太陽はますますの高みからさんさんと見下ろしてくれる。迷惑なことこの上ない。この暑い中荷物持ちをしてる自分の身にもなつてほしいものだ。

「あと三つぐらい回りたいんですけど」

「・・・さすがに休憩だ、春香。お前は大丈夫かもしけないが俺はもう頭のてっぺんが暑くて暑くて」

周りの高層ビルはこのよだな場面で役に立ちそなものだが、生憎の天気、時間帯が合わさつて影の少しも出来たものではない。おまけに普段は心地よく吹き抜けるビル風も、今日に限つては特大のドライヤーと化している。

街に出て三十分。頭頂をじりじり焼く熱線と四方八方から次々襲い来る熱風に、田高は早くも白旗を上げた。

田の前の春香はと詰つと、帽子などかぶつて涼しげな顔をし、「仕方ないですね」などとこぼしている。

「どこかでお茶します?」この辺にいいお店あつたかな?」

「いやすまん春香、探す気力も俺にはもうない・・・昼時だし、フアミレスでご飯でも食べないか? 飲むからさ」

「え? えつとじやあ、サイ リアのミラクルダイナマイドチョコサンドーもいいですか!?」

「ミラ・・・? よくはわからないけど、そこでいいならひとつよう手放しで喜ぶ春香に応じてやりたい気持ちは山々だが、暑さにやられて思うように動けない。

愛もこれぐらいになつたらいいことになるのだらつか・・・。

まだ気が早いような気もするが、娘を思い田高は静かに溜息をもらした。

サイ リアは盛況のよつだった。

以前来たときの一倍程度の客入りで、避暑に来た客とは反対に店員はめまぐるしく動き回つており、入るのが申し訳なくなるほどだ。

さて、そんな空氣もお構いなしにテーブルの中央にそびえる巨塔『ミラクルダイナマイトチヨコサンティー』の処理にかかった春香だが、どうやら予想以上の物量だったようで、今はスプレーを置いてメロンソーダをおとなしく飲んでいる。

思いもしなかった強敵に遭遇して、命からがら前の村に逃げ帰つたといふところだろうか。今は体力を回復しつつ、ゆっくりと敵の姿を観察している。

「すごい量ですよね、これ」

「まあ確かにそうだが・・・珍しいな、春香が甘いものに對して前情報を持つてないつていうのは」

「新発売ですから」

友人の中にもこれに挑戦した人はいなかつたんですよ、と春香は再びスプーンを手にする。

「この前営業でこのあたり通つた時に見つけたんですよ。それからずっと気になつちゃつて、千早ちゃんも連れてきたかつたんですけど」

「・・・千早はどんな顔をするだらうなあ・・・」

「ですよね。千早ちゃんつて何が好きなんでしょうが」

「そんなこと訊かれてもなあ・・・」

日高にも春香にも、千早は自分のことをあまり話そつとはしない。人付き合いが苦手なのか、踏み込まれるのを嫌う性質なのかはわからぬが。

「そういえば千早も今日は出かけるんだつたな」

「んー、電話ではそんな感じでした。千早ちゃんも学校の友達とお出かけしてるんでしょうが?」

「千早が、ねえ・・・」

普段見ている彼女の姿から、少し想像を巡らせる。たとえば春香のように買い物を楽しんでいたり・・・。または喫茶店でおしゃべりにふけっていたり・・・。万が一にはゲームセンターとか・・・。

どれも合わないなあ・・・。

「つ～む・・・あまり想像できないな。千早が楽しそうに遊んでるところ」

「失礼ですよプロデューサーさん。千早ちゃんだって普通の女子高生で・・・っ！プロデューサーさん、伏せて！」

「は？突然何うつー？」

ガーンッ！と突然額から鈍い音が広がる。向かいの春香に頭を掴まれ、テーブルに叩きつけられたのだ。

「～～～～！、！？」

「静かにしててください！」

「今ので逆に目立つただろがっ」

「千早ちゃんです」

春香も少し頭を傾けつつ、窓側を指さす。その向こうには街中を歩く千早の姿があった。

「・・・尊をすればなんとやら、だな」

「夏の虫ですね？」

「『影』、な

「・・・」

どうやら素で間違えたらしく顔を真つ赤にする春香は、照れ隠しなのか残ったサンデーを猛スピードでかきこみ、勢いよく席を立ちあがる。

「プロデューサーさん、追いますよ！」

「お、おい！追うつて・・・お前買い物は！」

「時間があつたらあとで買います！」

「いやそうじやなくて・・・ちょっと待てって！」

伝票はとむかく荷物の一つも持たずに出で行つた春香を急いで追いかける。  
・・・レジのお兄さんには氣の毒そうな視線を向けられたのは氣のせいでだろう。

バスに乗つて十数分、そこからひたすら歩いて郊外に出る。細い道を迷うことなく進んでいく千早。

「ふう・・・はあ・・・千早ちゃん、どうまだ行くのかな・・・。

プロテコーサーさん、この辺りって何があるんです?」

「いや、さすがにここまで來たことないからわからないな」

その数十メートル後ろで息を切らす春香。田高は行く先を見ながら首を傾げる。

「中心街から随分離れたけど、誰かと会つ気配もないな・・・」

「ずっと住む街です・・・」れじやお買い物出来るといひもないですよ」

「ほら、千早曲つたぞ、追いかけよ!」

角に姿が隠れたことを確認して追いかけ、春香より先に千早を捉える。

春香は田陰を探して一休み、とこつたふつて、丁度田の前にあつた自販機に手を伸ばす。

「ほら、音でばれるだろ!」

「・・・プロテコーサーさん、ノリノリじゃないですか」

「・・・そう言わると否定はできない」

真剣そうな横顔に春香から思わずふと漏れたそのセリフは、少し熱の入つていた田高を正気に戻すに足るものだつた。

春香の顔色はそれほど悪くはないが、汗がだらだらと頬を伝つてゐる。長距離の歩行移動で少し疲れも見えた。

田高は財布の中を探つて、五百円玉を一枚取り出し、

「こんなに暑いと熱中症とか脱水症状とか怖いしな。ほい、これで買つてきな

と春香に手渡す。

「え、いいんですか?」

「アイドルの体調管理はプロトコーサーの仕事だからな。ただし、おつりはなちゃんと返せよ?」

「ありがとう!」ゼコマ一す!」

嬉々とした表情で自販機の前へと向かう春香を見送つてから、千早に視線を戻した。

幸い今のやり取りの間に見失つてしまつことはなく、千早は辺りを気にしているのか、それとも何かを探しているのか群青の髪を揺らしながら、速度を落として歩いていた。

まさかここまで来て迷つた、なんてこともないだろ? 次の曲がり角に差し掛かつた頃、春香の声が耳元に近づく。

「戻りましたー、千早ちゃんはどうですか?」

「ん、まだそこにいるけど・・・もしかしたら気付かれたかもしない。なんかきょろきょろしてんし」

「え、本当ですか?」

「いや、まだわからん。後ろ見ないからまだ気付かれてないんじやないかな。何かを探してるような感じだ」

「このあたりで何かを探すつて・・・あ、プロトコーサーさんこれ

「ん?」

春香がについつとして手渡したのは、230円の小銭と

「コーヒー?」

「プロデューサーさんも喉乾いてるかなと思つて一緒に買つて来たんです。まあわたしのお金じゃないですけど・・・」

あはは、と苦笑いの春香に田高は軽く微笑み返した。

「いや、助かるよ。丁度そう思つてたところだ」

「ほんとですか? ブラックですけど、微糖のほうがよかつたとかないですか?」

「微糖はすこし苦手なんだ。変に甘こよついの方がすつきつするしな」

そう言ってプルタブを空けて一口。

「ん、でもそんな悩んだならお茶とかでよかつたんじゃないのか?」「張り込みにお茶は似合いませんよ?」

「なるほど・・・」

よくわからない理屈をさらりと述べた春香といえど、しつかりスピーチドリンクなど手にしている。それも絵面としてどうか、などと突っ込みを入れようとしたが、

「あ、プロデューサーさん! 千早ちゃんがいません!」

「えー?」

春香の叫びによつてそれは未遂に終わった。いつの間にか千早がどこにも見当たらなくなつてゐるのだ。急いで先程の位置まで走るが、影も形もない。

「しまつたなあ・・・もつとしつかり見ていれば・・・」「仕方ないですよ、ちょっとこのあたり探してみましょ?」

春香の言葉に頷いて最寄りの角を曲つてみる。住宅街を当てもなくさまようのは危険なのが、今回は幸い曲つて少ししたところに大きい家があり、そこから先は行き止まりになつていた。

引き返してその次の角に入つても、時間が経りすぎたせいか千早の姿はなかつた。

「あ、プロデューサーさん」

「見つけたか?」「?」

「いえ、そうじやなくて・・・あそこにお花屋さんがありますから、ちょっと訊いてみましょ? もしかしたら前を通つてゐのを見たかもしれないし」

春香が指したのは、いかにも老舗という感じのするそれだ。併まいも今時のものよりもずっとおとなしく、住宅街にすっかり溶け込んでいる。

「そうだな、そこで情報を得られなかつたら、仕方ないから帰るつ

「はーい。あ、出て来た。プロトコーサーさんまで待つて下さい。すいませーん！」

店外に出している花の手入れに来たらしい男性に春香は声をかけながら近寄った。

「いらっしゃいませー」

「あ、ごめんなさい。お花を買ひに来たわけじゃないんですけど…・この辺でロングヘアの女の子、見ませんでした?」

マニコアル通り丁寧な接客に良心が痛むのか、一言謝つてから本

題へ入る。

「あー、その子だつたらウチで花買つてから向いの廻を行つたけど…・キミ、如月さんの友達?」

「え? 千早ちゃんを知つてるんですか?」

「去年も一昨年もこの田に来てたからね。そのもう少し前はお母さんと一緒にで、その時話したから覚えてるんだ。そこを曲がつて少ししたら広い所に出るから、そのあたりにこると迷つよ」

青年はあつち、と指で指し示す。

「あの、それつていつ頃から?」

「え、つと…・・・」

少し空を仰いでからまたすぐ戻り「うん」と誰に言つてもなく肯定し、告げた。

「確か、六年前ぐらいからだつたかな」

「ふ、プロトコーサーさん…・・・本当にひつひつで合つてゐんですか?・・・?」

「いや、春香が訊いたんだつ?・・・・」

先程までとは反対に若干涙声。

「だ、だつてここ・・・お墓ですよ・・・?」

周りを見回しながら歩幅を狭め、日高の後ろに隠れるようにして進む春香に、日高はため息を漏らした。

「大丈夫だよ春香。今は昼間なんだし」

「でもやっぱり雰囲気違いますし、それにこの前見たホラー映画がまだ頭に残ってるんです」

「また見たのか・・・友達からの誘いでも怖かつたらそういうのは見るなつて前にも」

「いえ、誘つたのはわたしなんですけど・・・」

「・・・・春香、お前やつぱり好きなんじやないのか？」

「・・・・えへへ」

「だめだ。これは怖いもの見たさとかそういうのじゃない。お化け屋敷とかに進んで入つて、絶叫を楽しむタイプだ。」

「それのシチュエーションが丁度こんな感じだつたんですよ。大学生の一人が肝試しの下見で昼間の墓場に・・・」

「いや話さなくとも」

「自分だけ怖いの嫌じやないですか。で、その二人が周囲を終わつて・・・」

巻き添えか、と日高は苦笑する。映画を一緒に見に行つたという友人も、そういう理由で誘つたのだろうか・・・。

「帰ろうとしたら、誰もいなかつたはずのお墓から変な歌声が聞こえ」

「・・・・」

「・・・・」

空に響き渡る、透き通つた高い声。春香の顔がみるみる青ざめていく。

「ふ、ふう」

「そういう話は靈を呼ぶつて言つよな」

「や、やめて下さいよ・・・」

「迷信だから気にしない。それより行つてみるか」

「あ、ちょっと待つて下さって！」

入口を探して入つていいく日高を止めようと追いかけのせ、脳裏に

再生されるものの怖さからか、次第に速度が落ちていく。

「プロデューサーさん、待つて下さってばーその映画だとこの先に

俺の予想だとこの先に・・・。

日高は遠くなつた春香の忠告を無視して進んでいく。先の歌声に聴き覚えがあるのだ。声がした方向に、曖昧に歩いていった。

少し歩くと、見通しのいい広場に出た。その歌声はもう聞こえない。日高は立ち止りきょろきょろとあたりを見回す。

「ちゃんと聞いてくださいプロデューサーさん、その先にロングヘアーの・・・ひつー？」

「えー？ どうした？」

と、遅れて追いついた春香は突然、素つ頓狂な声を上げて座りこむ。思いもよらぬ事態に慌ててフォローにかかる日高。

どうしたか、という問いに春香は一向に答えを言わず、その代わりカタカタと震えた指先で、自分の視線が釘付けになつている方を指さした。

見ると逆光でシルエットまでしか見えないものの、『ロングヘアー』の『女性らしき影』がある。

「・・・えつと、春香。その続き聞いてもいいか」

「ええ、な、なんですか？」

シルエットの顔と思しき部分が傾いた。こちらを見ている。

「なんでもいいから。それで、どうなるんだ？ その二人は逃げたのか？」

「・・・その時の記憶だけなくなつて、表向きは普段通りの生活に戻ります。ただし・・・」

「ただし・・・？」

シルエットが近づいてきた。夏日の強い逆光の所為でまだよく見

えてこない。

そんな状態で日高は固唾を飲んで春香の言葉を待つ。

「二人に見えてる景色は幻覚で、実は死後の世界に・・・」

「逃げられないのかよ！？」

「ああ、瓢箪から駒とはこのことをいつのか。靈を呼ぶなんて俺が言わなければこんなことには・・・」

終わった・・・。

「何をしているんです」

「・・・え？」

いろいろと覚悟していた一人にかかったのは、聞き慣れた女の子の声だった。

群青のロングヘアに、それが映える長身。どこか冷めた眼差しで一人を見下ろす彼女は、

「千早ちゃん！」

探していた当人そのものだったのだ。

「「「めんなさい」」

「・・・」

深々と頭を下げる両者に突き刺さる視線。千早は無言のままに一人を見つめる。

(プロデューサーさん、ものすごく痛い視線を感じるんですけど)

涙れを切らしたのか、頭を下げたままの春香は隣の日高に小声で話しかける。

(まあ、それが当然の反応だらうな)

「プロデューサー、何を話してるんです？」

「いえ、なんでもございません」

「ち、千早ちゃん・・・なんか怖いよ・・・？」

墓場の真ん中で下ばかり見るのも疲れたのか、春香は少しだけ視

線を上に傾ける。

「ストーカーまがいのことをされて、怖くならないわけないでしょう」

辛辣・・・いや当然の発言と相変わらずの差すよくな田つきに圧倒された春香は再び小さく縮こまつた。

その様子を見て少しばかり溜飲が下がったのか、千早は「はあ・・・」と小さくため息。

「・・・もういいです。それに随分前から知つてましたし」

「え、つと、いつから?」

「・・・あのね春香。同じバスに乗つててわからないわけがないでしょう。プロデューサーも、尾行するつもりならタクシーとかのほうがいいことぐらいわかるでしょ?」

「いや、金がなくてだな」

「あと、カーブミラーぐらいチョックしてください。思い切り映つてましたよ」  
「・・・なるほど、映画やドラマの見よつ見まねではだめ、とこう」とか。

さらに田高のそれに対する知識はなかなかに古い。電子機器の発達した現代からしてみればもうその方式は埃を被つている上、必要最低限の注意すら払つていないのでばれて当然だ。

「・・・でもそんなに前からわかつてたなら、なんで追い返さなかつたんだ?」

「・・・そろそろ話してもいい頃だと思つて。二人とも、こつちへ」

「わたしも?」

「そう、春香も。パートナーなんだから、私が歌う理由を知つてもらつたほうがいいわ」

「歌う・・・理由?」

見ればわかるわ、と返して千早は先に立ち、二人をひとつの墓の前につれて来た。

『如月家ノ墓』と書かれたその墓を見て、千早は一言、

「弟ですか」と告げた。

「え？ おどうと、つて……千早ちゃん、一人っ子じや  
「七年前に、交通事故でね。それからずっとこの田代お墓参りに来てこるの」

「え……あの……『めんなさい』。そんなことも知らないで勝手についてきたりして……」

「そのことならせつかも言つたでしょ？ 私が話したいから話してるのがよ」

「うん……」

「じゃあ、千早が歌つてるのは弟のためなのか」

「……昔よく褒めてくれたんです、私の歌を。憧れて歌い始めた舞さんの『ALIVE』を、一番よく聴いてくれました」

戻らない時代を懐かしみながら、千早は一言一言丁寧に繋ぎ合わせていった。

「弟のため……になつては思わないですけれど、両親が離婚して、母とも仲違いしている私にとって、この子との繋がりはもうこれしかないんです。この子がよく褒めてくれた、この歌しか……」

「……」

『ならいいんだけど……さて、そろそろ帰らないで大丈夫？ 夜遅くなると危ないし、親も心配するだろ？』

『……いえ、もう少し練習していきます。いつも遅い時間までやつていてるので、母もわかっていると思いますし』

初めて会った公園での彼女の表情が鮮明に思い出される。あの時の曇つたそれは、そういうことだったのか。

「だから私は、この歌で歌手としてトップに立ちたい。そして、きっとそれが私の」

「……千早ちゃん？」

「……あ、ううん、なんでもないわ」

それが私の？

弟のため、以外にも何かあるのだろうか。なんでもないセリフに田高は疑惑を抱く。

そして予感する。千早の歌の中心はおそらく、最後に出かけた『それ』なのだろう、と。

「ですからプロデューサー、お願ひです。私をトップボーカリストに導いてください。そのための努力なら、惜しむつもりはありませんから。これからもよろしくお願ひします」

「・・・ああ、俺も千早の歌が本物になるように努力する。出来るだけ歌の仕事をとつてくるよ。」しつこよろしくな

「あ、あの千早ちゃん！わたし、もう頑張るから！」一緒にトップアーティストになろう、ね！？」

卷之三

やがてその表情は柔らかい笑みに変わった。

そうか、やつとわかつた。千早の歌に抱く小さな違和感が。  
しかし・・・これは千早自身の問題。俺ができるのは、その手助けまで。

だができることはすべてしてやりたい。それがきっと、俺と彼女らが会った理由なんだと思う。

#### その4『緩やかな休日、緊迫した過りし方』（後書き）

前書きにも書きましたが、遅くなつて本当に申し訳ないです・・・。バイトスケジュールがきつくて、全然書く暇がない。この連休中にできるところまで書き進めておかないとなあ・・・。とここでちょっとした質問なんですが（面倒な場合は答えなくて大丈夫です）、この一次小説で、原作とのキャラブレが激しい、と思うキャラいますかね？原作準拠を掲げているので、もしそういうのがありましたら、言つていただければ可能な範囲で直します。

次回はシリアス（笑）です。お楽しみに？

追記・最後直しました。完全に気の逸りです。日高がそんなこと知つてゐわけねーじゃんと慌てて直しましたww

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1123v/>

---

私は愛どる！春香＆千早過去編

2011年10月9日03時14分発行